

解 築 学 研 究

2023

Vol.1

解築学卒論生募集テーマ / 都市流動史 / 日常的復興史 / バラックスラム史 / 解築学に向かう美学 / ある村の災害史 / 路上観察学会の美学 / 郊外から千年都市を紐解く / 生き物とヒトの構築技術 / 震災バラック再考

早稲田大学中谷礼仁研究室

解築学研究

Vol. 1

2023

早稲田大学 中谷礼仁研究室

教員

中谷礼仁

M2

中根伊槻

M1

口石直道

呉雄仁

佐藤連

牧野優希

B4

筏千丸

関根敬介

野々村葵

森原正希

若佐歩

自然と人間の物質様態変化 MAP

| 概要

本ダイアグラムは、人間と自然による物質の様態変化の分類を示し、段階的な発展の過程を示している。2022 年度解築学ゼミが作成した「人間による物質の様態変化 MAP」(p. IV) は地球の自律的運動から遊離した人間による物質の移動を整理していた。物質は人間と出会い、目的を持って構築される。そして構築物は目的の達成に向けて最適化されていくが、いずれは脱文脈化され、ただ自然の摂理にしたがって漂流する。しかし人間と地球とは相互に影響を及ぼしあうものであり、物質の様態変化を記述する上では、地球の自律的運動との連動的な関係性を見る必要がある。今年度作成のダイアグラムは、このサイクルにおける脱文脈化から関係の発生までに自然の円環という視点を加え、アップデートしたものである。

| 本ダイアグラムについて

ハンナ・アーレントは「人間だけが死すべきもの」とし、人は生から死までの直線としての「生命」を生きており、自然の円環の侵食は人工の世界を老化させ、衰退させ、世界の耐久性を脅かしていると唱える。私たち現代人は、アーレントの主張と同様に物質の様態変化を引き起こしながら、現在では地球の自律的運動から逃れ、離脱するように建築行為を含む創造行為を行い蓄積している。マクダナー+ブラウンガードの C2C (cradle to cradle) ダイアグラムではバイオスフィア (自然代謝過程) とテクノスフィア (人工代謝過程) の両者は交わらないように円環上に閉じている。また、サーキュラーエコノミーの文脈で論じられる、エレン・マッカーサー財団の示したバタフライダイアグラムも同様に、テクノスフィアの理論でバイオスフィアをデザイン可能な代謝過程として位置付けていくことを目指しており、明確に自然と人工の円環を切り分け、そして人工的代謝を主体として自然代謝を位置付けている。しかし人間は極めて生物的存在であり、人工物をつくり生存するという条件下では、人工の世界は自然の円環過程から切り離され得ない。本ダイアグラムの特徴は、物質の移動という視点から人間と地球の関係性を見ている点にある。物質にとってはテクノスフィアもバイオスフィアもなく、ただ2つの円環を区別なく移動しているにすぎない。環の差異とは、即ち循環の担い手の違いでしかないのである。そして2つの円環は、互いに影響を及ぼしあいながら成り立っている。2つの円環の交差によって、自然と人間の物質代謝の軌轢や現象、時間軸の捉え方の違い、また自然と人間の物質を通した交わりや発見のあり方などを想像することができる。

| ダイアグラムの要点について

●点 α では地球の自律運動により表出された大地や地形、地層等の物質群と生命が遭遇し目的の認識段階が発生する初段階である。人間は運動の要因である気候・環境変化などに影響を受け、快・不快に対しての「欲動」が発生する。そして生命は「ルーズ」な技術を生み出し、そして意識的に適用していく。その意味では、点 α は「関係の発生」と言える。点 α の周辺領域は、物質と新たな関係を見立て関係を築く段階における、初源的な解築行為であると考えられる。

●点 β は、人工物等を含む生命の構築物が大地に廃棄・遺棄・ゴミとなり大地の自律的運動に回収・漂流される段階である。 β では「災害」「気候変化」「放棄」などによる影響を受け人工的環境の破壊行為が発生し、強制的に目的や過程を捨象される。意識的に適用された構築物の目的や過程が捨象され、脱文脈化を経て物質群となり、自然の代謝過程のなかで α 地点までの円環運動に参画し、再び生命と遭遇し発見されるまで漂流し続ける。脱文脈化としての点 β は、人間が引き起こす脱文脈化としての衰退論や廃墟論に始まる。また、災害からの人間の復興等は、構築物の目的や過程が地球の自律運動が引き起こした脱文脈から立ち上がる時に生まれる、固有の美学や関係性の紡ぎ直しであると言える。また、 β から α への物質の代謝移動には多様な時間軸が存在する。例えば廃棄物の分解、核廃棄物などは地球環境に対して長い時間をかけて変化変形を加えていくだろう。逆に災害からの復興やリサイクルなどは大地に即時的には放棄されるが、その一部は分解的な過程を経ずに、すぐさま人間に発見されリサイクルされ人工物の構築に再利用される。このように β から α への物質代謝にはいくつもの経路が存在している。

森原正希／若佐歩

人間による物質の様態変化 MAP (2022)

人間はある物質に対して形状を変化させたり、化学的な反応を起こしたり、解釈を加えたりすることで、「構築行為」を行ってきたわけだが、それが意識的なか無意識的なのか、またその物質に対する操作がルーズに行われているのか、厳密に行われているのか、この二つの軸で考えていくと、ものの生産における歴史分析の手法としてうまくいきそうである。そして無意識のかつルーズな構築をA、などというように各領域をABCDと名付けた。

■ A の領域について

人間が外部環境の中で、快・不快に対して直接的、瞬間的に反応する際に起きる物質への作用である。例えば、雨が降ってきて木陰に隠れることなど。これは雨に当たるという「不快」に対して咄嗟に無意識に行われるわけだ。ただしそれは木陰でなくてもよく、それが選ばれたのは偶然で、つまり代替可能だということになる。そしてこれを「ルーズ」と形容している。

■ B の領域について

合目的であるが代替可能なものである。ある構築行為に対して目的が明確に設定されているが、その実践は身の回りにある材料などの環境に密接に関わっているような状況である。先の雨の例えで言えば、雨を防ぐ、という明確な目的に対して、近くにある葉っぱを紡いで傘を作るといった感じだ。目的が意識されて構築が行われる。しかし、遠くからブラ

ックや鉄やらを仕入れて、ということとは質的に異なる。ここら辺がルーズであり、厳密ではない。

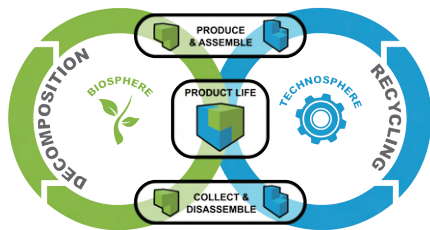
■ C の領域について

ある目的に対して無限の最適化を志向していく構築である。それは必然の結果であり、代替が不可能なものの様に見える。これは運命的に文明が向かっていく方向なのだと考えている。

■ D の領域について

無意識のかつ厳密な構築、これは人間の手から離れて自然摂理のみが物体に作用した状態だと考えている。具体的に建築で言えば廃墟などがそれに当たると思う。

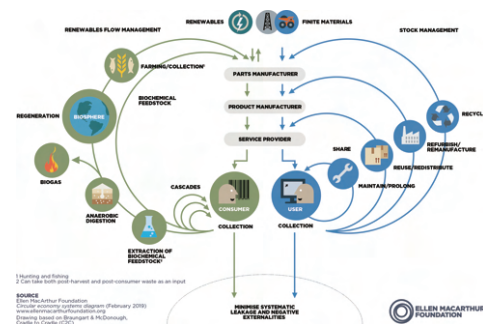




C2C, cradle to cradle model

マクダナー、ブラウンガード（2002）

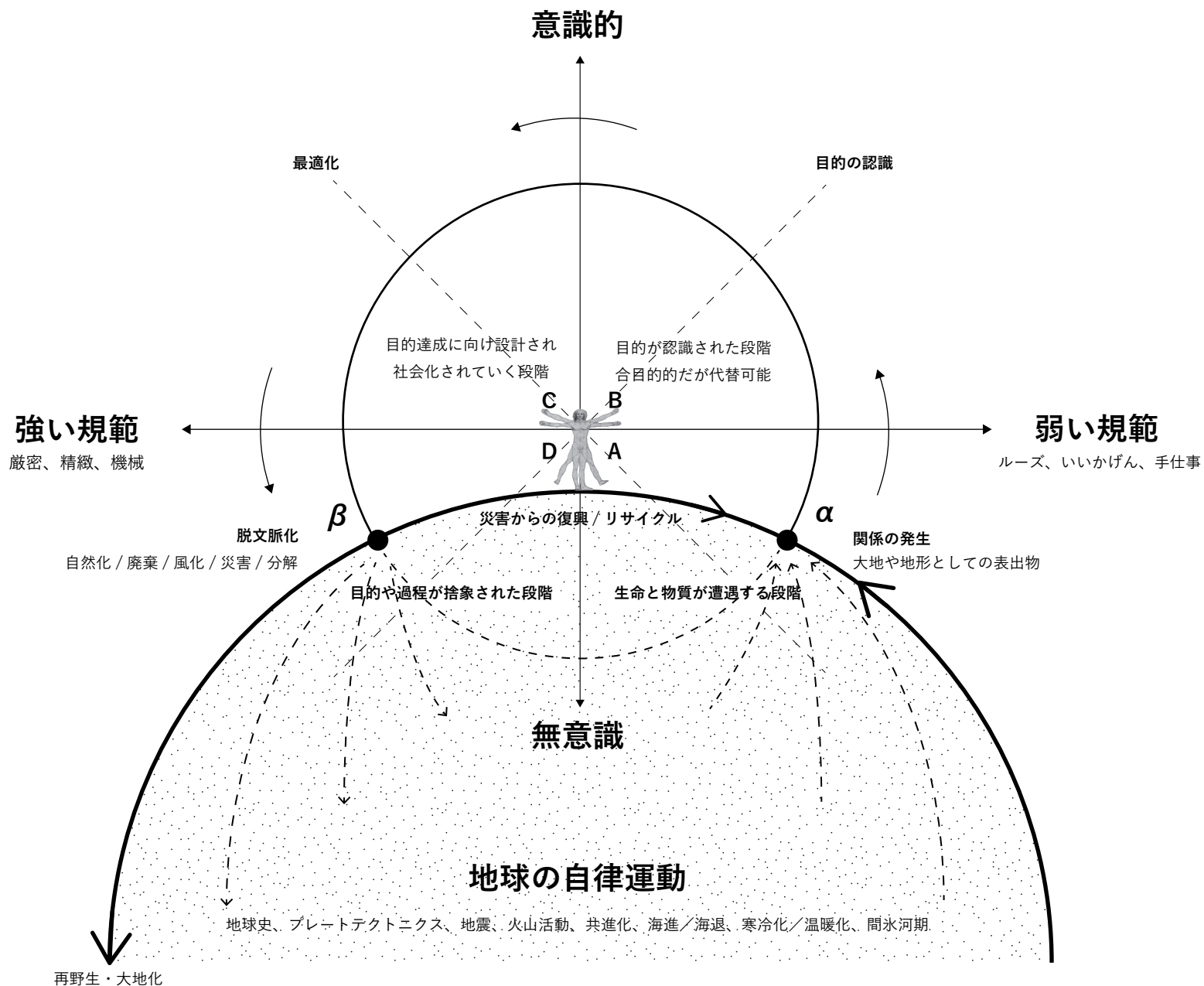
人口物と自然物の代謝過程を2つの円環として表現し、前者を再資源化で回るもの、後者を生分解で回るものとした。人間は適切なデザインによって、人工物が自然界に入り込んで悪影響を及ぼすことを防がねばならないとする。



バタフライダイアグラム

エレン・マッカーサー財団（2009）

C2C図を下敷きにして考案されたもので、2つの円環はそれぞれ再生可能資源、有限資源を表す。それぞれの円は中心からの距離で環境負荷の大きさを示しており、より環境負荷の少ない内側の円を目指すべきであるとする。



自然と人間の物質様態変化 MAP

早稲田大学中谷礼仁研究室（2023）

本ダイアグラムは物質の様態変化、移動という視点から自然と人間との関係性を整理したものである。上の円は人間による物質の様態変化を示し、下の円はバイオスフィアをも含んだ地球の自律運動全体を示す。主義主張を廃し物質の移動のみに着目して世界を見た時、2つの円環は重なり合わざるを得ない。2つの円環の重なり、そして地球を管理不可能なプロセスと捉えた点において、C2C図、及びバタフライダイアグラムでは抜け落ちていた視点を再検討することができる。ここから自然と人間の相互関係へ新たな視座を与えることができるのではないかと。

目次

2023 年度解築学ゼミ 年間スケジュール

自然と人間の物質様態変化 MAP	III	
年間スケジュール	1	4 月 中谷研究室内解築学 ゼミ発足
はじめに	2	
2023 年度解築学ゼミ卒論生募集テーマ	3	5 月 5/8 今年度計画作成
		5/15 勉強会テーマ検討
解築学ゼミ都市流動史勉強会	5	
都市流動史という視点	6	5/29 勉強会計画作成
1. 都市復興史、あるいは日常的復興史	8	6 月 6/12 都市流動史勉強会 #1
2. バラック・スラム史	10	6/19 都市流動史勉強会 #2
3. 解築学に求められる美学とは？	12	
		7/3 都市流動史勉強会 #3
2023 年度中谷研究室解築学卒業論文	15	7/10 都市流動史勉強会 #4
中谷研究室解築学卒業論文ダイジェスト	16	7 月
卒業論文ケーススタディ：1		
ある村の災害史	19	7/24 都市流動史勉強会 #5
卒業論文ケーススタディ：2		7/31 都市流動史まとめ
路上観察学会の美学	25	
卒業論文ケーススタディ：3		
郊外から千年都市を解く	31	8 月
卒業論文ケーススタディ：4		8/22 年度末の打ち合わせ
生き物とヒトの構築技術	35	9 月
卒業論文ケーススタディ：5		
震災バラック再考	39	10 月
出典・参考文献	45	11 月
		11/16 卒業論文最終提出

はじめに

解築学。解き、築く学問。相対する学問に建築学がある。なぜ今解築学だろうか。

2022年度初旬、早稲田大学の建築学科の歴史系中谷研究室で発足した「解築学」ゼミ。数多くの勉強会を重ね、「人間による物質の様態変化MAP」を作成した。この年に解築学ゼミ初の卒業論文が誕生した。

2023年1月18日。まだ入室をしていない学生が研究室を決定するための卒業論文説明会にて「解築学ゼミ」がお披露目となった。我々は、皆興奮していた。当時のマニフェストをそのまま引用したい。

昨年度の解築ゼミでは人間による空間構築行為の特質を根本的に捉え直した構造図を完成させた。来年度以降はこの図式に沿いつつ、建築生産、都市計画分野の研究室、さらには他大学との連携をとりつつ、解築の方法の構築検討をより具体的に行う予定である。解築ゼミは第二のメタポリズム・グループである。

2023年度の解築学ゼミは、2022年度の活動を踏まえて解築学の主要素を「都市流動史」と「解築設計施工史」に大きく二分した。またそれらを細分化し、勉強を重ねた。前者はゼミ活動、後者は卒業論文にてその多くが賄われた。

これらの卒業論文は、2022年度に制作された『人間による物質様態変化MAP』をもとにテーマは設定された。これらの過程に表出した要素を一つずつ丁寧に編み直すことによって、2022年度に制作された「人間と物質の様態変化マップ」をアップデートし、新たな解築学のビジョン「自然と人間の物質様態変化マップ」を社会に提示する。

このZINEの制作の目的はただ一つ。この熱気をあなたにも共有したい。

中根伊槻／関根敬介

地球活動から
現代文明までを行き来して。
ブリコラージュよ!

<Great Bricolage>

2022年度 解築学ゼミ 宣言文

これまでの建築は、文字通り「建て・築く」ことに集中してきた。

しかし、やみくもに「建築」を続けることは、将来的に「建てづまり」とでも

いうべき都市の終点を迎える。都市・建築空間を柔軟に新陳代謝させる方法や考

え方の到来がまたれる。問題を「解いて」、正しく「築く」。それを歴史的な視点

から検討しようとするのが解築ゼミである。解築ゼミが目指すのは、保存/スク

ラップ&ビルドの二者択一ではない、柔軟な空間構築法の理論化である。

物質の循環や移動をスムーズに行い、環境にも無理のない柔軟な築き方を過去

から探し、未来のために提案することである。そもそも過去の空間構築の歴史は、

現在の「建築」よりも有限の資源をうまく循環して人間的环境を作り上げてきた。

その意味で過去の事例は「解築」の宝庫である。また近現代において同様な問題

意識を持った建築運動に、1960年代の早稲田大学発のメタポリズムがあった。

しかしその運動は全く都市の新陳代謝を生み出し得なかった。なぜそのような

なってしまったのか、メタポリズムの失敗から学ぶ必要がある。昨年度の解築ゼ

ミでは人間による空間構築行為の特質を根本的に捉え直した構造図を完成させ

た。来年度以降はこの図式に沿いつつ、建築生産、都市計画分野の研究室、さら

には他大学との連携をとりつつ、解築の方法の構築検討をより具体的に行う予定

である。解築ゼミは第二のメタポリズム・グループである。

歴史の役割:
美学と普遍的
構造の認識

建築しない時代に

どのようにモノをつくるのか?

解築は
地球上の全生命の
構築・地球活動
を含む

建築学科で教える
「問題」の「解き方」
「築き方」は正しい!
我々はそれ以外の
方法を意図的に
模索しているのだから
いい。
おかげで
「解き方」は
ないのよ!

解築理論は
社会実践と密着する
建築学

失敗したのはなぜか。
①ムーブメント(南T)に
ついて。
モノの時間を動かす(ムーブメントを
動かす)のは人間である。
時間・空間にどう関係している
かは、時間により変わる
人の意見を汲むべきだと
思うが、ムーブメントはそういう
ものを構築しすぎている
ムーブメントは、いつ誰がどの
ように動かすのかわからない。
②南Tの第三の原則(南T)は普遍的
な性質を
社会変容等に
よって変容を
求める。永続的にモノの
普遍的な性質をもつ形を
保証するのは難しい。
一特に、メタポリズムの建築は
そのパーツが大きすぎる。
特殊な生産体制が必要。
普遍化はしないだろう。

出典:
2023年度解築学ゼミ 卒論生募集テーマ
(執筆 中谷礼仁)

2023
今年度は、解築学・都市計画・建築学、
解築設計施工史と分けて勉強会にの
ぎ、解築学の対外的な評価は日本
の状況に即していかないとはい

解築学ゼミ 都市流動史 勉強会

今年度は解築学に通じる歴史事例を収集し、現代でも参照可能な普遍的構造を取り出すことを目的として、6月から7月にかけて文献読解による勉強会を行った。

変化し循環する都市の諸相を見ようとするこの勉強会のテーマは「都市流動史」と名付けられた。

この勉強会は、都市流動史と呼ぶまだ判然としない領域に属するであろう3題から構成された。

1. 災害復興史、あるいは日常的復興史
2. バラック・スラム史
3. 解築学に求められる美学とは？

都市流動史という視点

都市流動史とはなんだろうか。それは明確な定義があるわけではなく、単なる造語である。しかし、都市流動史という言葉から連想するイメージには、ある程度共通するものがあると思う。始まりはその程度のものだったと記憶している。ただ一つだけ言えるのは、解築学の建築史的研究をするんだと意気込んでみても一体なんだからはっきりしなかった方針が、「都市流動史」と口にしてみることではっきりとしたような錯覚を感じ、皆が動き出したということだ。各々の思考回路の中で解築学の構想と都市流動史というテーマが繋がったのだろう。こうしてある程度の共通認識と各人が各様を持つ解釈の広がりがある結果的に良い方向に働くことを願い、この勉強会は始められた。

万物は流転する。

直球で言葉に表したのは古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトスが有名だが、日本においても鴨長明の方丈記の冒頭の一節に通ずるし、また仏教にも流転概念があるし（そもそもヘラクレイトスの言葉の訳語はこの仏教用語を当てたものなのだろうが）、私もこれにひどく共感する。このことから考えてみるに、物質というものは常に動き変化するが存在し続けているのだというようなこの感覚は、地球に存在し活動する生物が直観する必然なのではないかと思えてくる。

「都市流動史」というテーマのもとに勉強会を始めた私たちもこの直観の中にいた。しかし少し違うかもしれないのは、それを「都市」に見ようとしたことである。私たちはこの勉強会を通して、都市という何か自然の原理に抗おうとしているように見える人間行為の歴史に、人間が意図せずあ

からさまに地球の流転現象の一員として振る舞っていた瞬間を見ようとしたのである。

ただし、その振る舞いを歴史的に見るとは言ってもそれが私たちにとって魅力的でなければ意味がない。私たちは歴史を見ると同時に人間行為の可能性を見ているのだから。私たちは人間が目の前に運命的にあるいは必然的に存在したものといかにして関係を結んで生きてきたのか、その健気な姿に魅了されたのである。

1. 災害復興史、あるいは日常的復興史

都市の「復興」という目の前の環境の物質的価値が急激に見失われた時期に焦点を当て、そこから人間と物質が社会の中でどのように関係を結んでゆくのかを見る試みである。また復興期が急速な破壊と再生の物語であるとするならば、廃棄物と人間の関係をその緩やかなものとして捉えてみる。単なる災害論を超えた私たちの日々の行為に関わる論考である。

2. バラック・スラム史

ここでは都市的なシステムと住民の手仕事の創造行為との協働の歴史をバラックとスラムの歴史に見ようとしている。バラックとスラムの歴史を都市との関わりとしてみることで、アドリブ的な住環境形成の議論を社会システムの中で考えることができるようになるだろう。

3. 解築学に求められる美学とは？

この論考は解築学の美における時間論である。事物は必ず時と共に腐敗、劣化や人間社会の変化の影響を受けて、社会秩序から遠ざかっていく。しかしそれらは時として廃墟、または都市の幽霊として存在し続ける。この論考で注目したいのは人間はそれらに「美」を見出してきた歴史があるということだ。その美的感覚と解築学の接点はどこにあるのだろうか。

中根伊槻

勉強会文献一覧

1. 都市復興史、あるいは日常的復興史

■都市流動史勉強会 #1

レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』

■都市流動史勉強会 #2

ケヴィン・リンチ『廃棄の文化誌』

福岡亮大『復興文化論』

2. バラック・スラム史

■都市流動史勉強会 #3

今和次郎『住居論』

田中傑『帝都復興と生活空間』

■都市流動史勉強会 #4

ジェイン・ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』

布野修司『スラバヤ 東南アジア都市の起源・形成・変容・転成：コスモスとしてのカンボン』

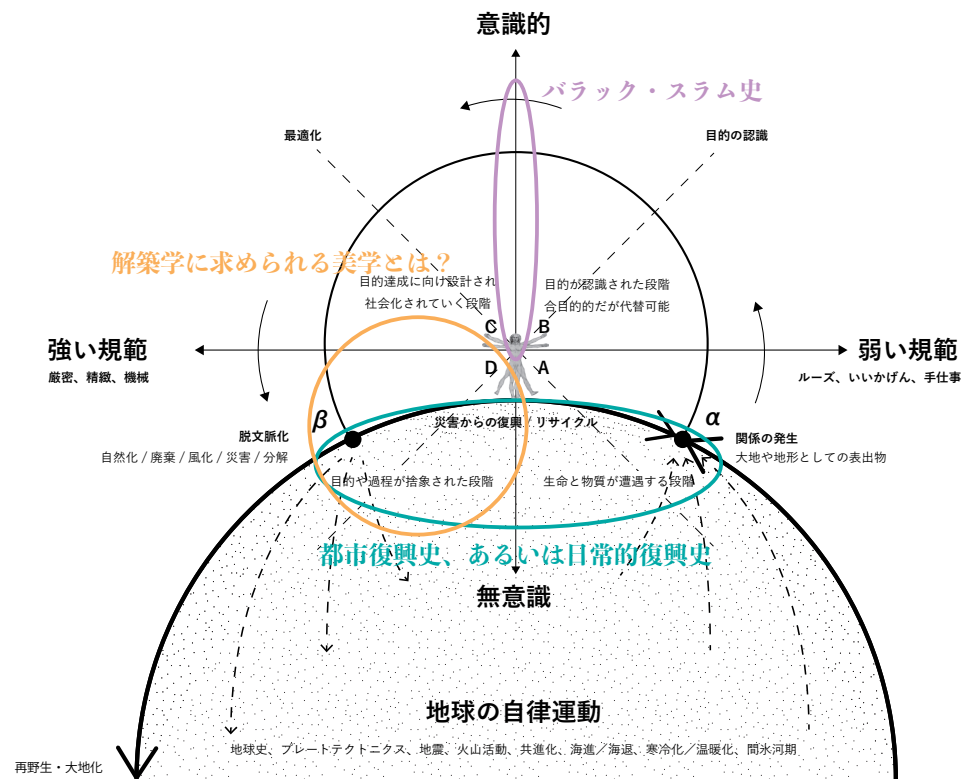
3. 解築学に求められる美学とは？

■都市流動史勉強会 #5

エドモンド・バーク『崇高と美の観念の起源』

赤瀬川原平、南仲坊、藤森照信『路上観察学入門』

唐木順三『中世の文学』



「自然と人間の物質様態変化 MAP」における
都市流動史勉強会テーマ配置

1. 都市復興史、あるいは 日常的復興史

レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』

ケヴィン・リンチ『廃棄の文化誌』

福岡亮大『復興文化論』

「地震、爆撃、大嵐などの直後には緊迫した状況の中で誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す。」(『災害ユートピア』p.10)

レベッカ・ソルニット著『災害ユートピア』は、過去 100 年間の災害事例から災害発生直後に被災者間で相互扶助的な共同体が形成される状況をレポートした。災害社会学の文脈から語られることの多い本書を「物質の破壊と再編」という観点から読み直すことから始めよう。

1906 年のサンフランシスコ大地震では、地震発生から数日後には被災者により瓦礫や廃材から作られたストリートキッチンが食料を無償で提供し、食料品店が在庫を被災者に開放するなどの利他的行為が観測された。地震はサンフランシスコ市街中心部を破壊した。市民の誰もが平等に破壊を目の当たりにし、全員が同じ苦境に置かれていることを認識したことで、日常の社会秩序を超えた即席の救援コミュニティが誕生したと著者は述べる。被災者同士の紐帯と同様に、建造物や資材、家財道具も平等な破壊と秩序（所有関係や部材構成）からの開放を受け、即席の再編が可能となった。焼け出され公園に集まった市民の目には、瓦礫は誰でも自由に使える建材の山と映っただろう。著者が図書館のアーカイブから発見した、公園や大通りに出現したちぐはぐな資材を組み合わせ、ユーモラスな店名を掲げた無数の掘立小屋は、瞬間的な大規模破壊の直後では誰もが物質の再配置に参加できた可能性を例示する。著者が丹念に

描写するのは災害ユートピアを経験した被災者の〈喜び〉である。物質と社会秩序を部分的だとしても再編できる自由を手にした避難民は、孤立した個人が「社会的自己」に転換する喜びを享受した。この感情を手がかりに、次の文献に移ろう。



図1 掘立小屋のキッチンスタンド
〈シャ・ノワール（黒猫）〉



図2 掘立小屋の
キッチンスタンド〈パ
レスホテルグリル〉
豪華ホテルや有名店
を真似た店名やユー
モラスな店名が多く
見られた

都市計画家として名高いケヴィン・リンチは晩年廃棄のプロセスについて思索を深め、遺稿はリンチの死後『廃棄の文化誌』にまとめられた。本書冒頭でリンチは「廃棄のある社会」と「廃棄のない社会」のファンタジー的イメージを描しつつ、消費が完全循環かの両極端に陥ることなく廃棄過程が内包する複層的な価値観に目を向け、廃棄から将来創出されるであろう新たな技術や儀式の断片的イメージを提示した。すなわち、廃棄が人間が生存する中で重要な要素であることを肯定し、「廃棄の愉しみ」を味わうべきだと唱えたのである。不浄とされ軽蔑される廃棄物も一度捨てられるからこそ、他者が別の価値を発見することができる。とりわけ、人々の生活様式が縦横無尽

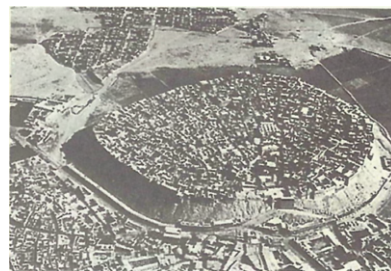


図3 イラクにある現
アルビルの足元の丘は
6-8 千年に及ぶ絶えざ
る居住がもたらした廃
棄物の集積である

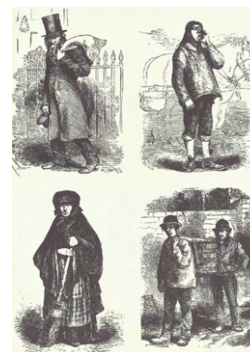


図4 専門化した取引
は廃棄物に関しても行
われた。19 世紀のイギ
リスには、廃棄物取引
のきめ細やかなネット
ワークが存在した

に絡まり合い、生産・消費・廃棄が隣り合わせて行われ続ける都市では、廃棄物を取り扱う専門業者が出現し歴史上廃棄物や廃棄場所の転用が絶えず行われてきた。リンチにとって、廃棄は物の一生に必然的に付随する壊されるべき時の到来であり、次の利用法を示唆する隠された知識の集積だった。リンチは廃棄が日常的に長期間かけて進行する破壊であることに気がついていて。そして廃棄行為に楽しみを感じ、廃棄物に有用な使い道を発見する興奮を見出した。いわば廃棄による破壊から日々有用なものを拾い上げ新たな価値を再編する〈日常的復興〉の喜びである。消費と循環の二者択一を迫られるふたつのディストピア的将来像を避け「廃棄の愉しみ」を日常的に享受できる社会の到来を、路上から都市を考察し続けた都市計画家は晩年に展望したのだろう。

福岡亮大著『復興文化論』は柿本人麻呂と空海を対比させ、この「愉しみ」の感情に肉薄する。空海は大陸から真言密教を輸入し、宮廷から完全

に切り離された峻厳たる自然、高野山に拠点を構えた。対して、持統天皇に仕えた人麻呂は内乱で荒廃した古都を和歌に詠み、呪術的な思念から鎮魂を試みた。空海の実践が社会と隔絶した自然の発見であり自らの存在価値の力強い立証であったのに対し、人麻呂の行為はあくまで廃墟化した都で土地との霊的な結びつきを希求し匿名性をまとわせた。人麻呂の創造力は土地と人との関係性の回復、ひいては「もの」と人の感性的な結合に向けられた。人麻呂の自己は「もの」との関係付けにより発見される他律性に基いていた。著者は災厄からの復興期に日本文化の創造性が発揮されると指摘し、無常感や諦念を超えた遊動的な美学の成立を説く。人麻呂は単に古都の荒廃を嘆いたのではなく、そこに土地との次なる関係性の構築を見たのであり、復興期は人麻呂が他律的な創造力を飛躍させる土壌となった。

ソルニットが発見した大地震後の建材、市民コミュニティの再編とその時に被災者が感じた相互連帯の喜び。リンチが発見した日常的に目にする廃棄が宿す新たな使い道へ開かれる愉しみ。それらは、人麻呂が詠んだ他者や他の物質との関係構築により発見される創造性に通じている。解築の楽しさとは何か。それは破壊や解体を受け一度バラバラになったものから有用なものを目ざとく見つけ自分なりにブリコラージュすることで、物質自体だけでなくその物質がかつて持っていた意味や秩序までも再編してしまう自由さにこそ見出せる。無から建てられないことを悲しむのではなく、万物が新たな関係の発生を待ちながら地球のどこかをさまよっていることに期待せよ。それこそ「自然と人の物質様態変化 MAP」における点αの愉しみ＝一度手放した後に物質との関係を（再）発見する愉しみにほかならないのだから。

中根伊槻／筏千丸／森原正希

2. バラック・スラム史

今和次郎『住居論』

田中傑『帝都復興と生活空間』

布野修司『スラバヤ 東南アジア都市の起源・形成・変容・転成：コスモスとしてのカンボン』

○バラック史

バラック史では今和次郎著『住居論』より「仮住まい考」、田中傑著『帝都復興と生活空間』を扱った。関東大震災時の震災バラックの実態については卒業論文⑤に譲り、本稿では解築学との関係について述べる。

●問題→解答

バラックは問題とその解答が明瞭である。コールドタルで板の間隙を埋める、焼け残った塀を壁面として利用する、トイレを後付けするなど（図1～3）が分かりやすい。今はこのような「どんざいな工作手法」こそが焼け野にはふさわしいと記した。

●開かれたシークエンスとしてのバラック

問題→解答の明瞭さはバラックの解いて築くという手法に依るのだろう。大震災後のバラックは問題を解き解答を築くことの繰り返し、状態の連鎖としてのシークエンス（G.kubler (1962)）として作り上げられている。『時のかたち』ではシークエンスは事物の連鎖であったが、バラックでは改修・増築の連鎖として捉えることができる。バラックは利用者が満足する、または必要としなくなるまでは開かれたシークエンスである。

●解いて築く手法の特徴

解いて築く手法における問題は一人称的である。バラックの空間的問題を解決する際、縦方向に増築することは利用者（作業）の能力と大きく頑丈な材を要求するため、基本的には横方向に

広がることとなる。開かれたシークエンスとしてのバラックには完全な竣工段階がない。そのため、解いて築く手法は平時において法律により制限される。また、横へ広がる特性は土地の所有システムと相性が悪い。横に拡張をしたくても所有している土地の中でしか行えない。しかし大震災後のバラック令はそれらの制限を一時的に緩和し、解いて築く手法が自由に行えるようになったのだ。

●解いて築く手法における解体材の利用

解体材と新材は材の持ち得る情報が異なる。合目的的に作られた新材はその目的に適した情報を持ち、解体材は解体元の情報を何かしらの形で引き継いでいる。解体元を見ていればなおさらである。それらの情報は「利用の構想力」（松村(2016)）を掻き立てるシグナルとなるだろう。つまり新材が問題の解決策となるのに対して、解体材は問題の発見につながる可能性がある。この点において解体材は解いて築く手法と相性が良いと言えるだろう。

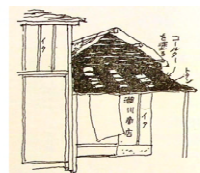


図1 コールドタル塗りのバラック

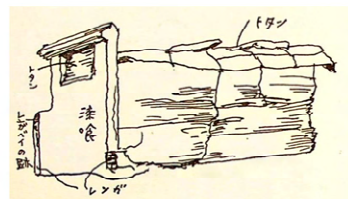


図2 塀を利用したバラック

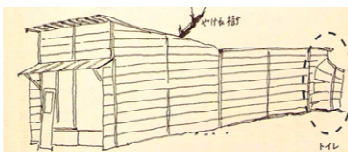


図3 トイレを増築したと見られるバラック

○スラム史

スラバヤーインドネシア第2の都市。そこにはスラム「カンボン」が存在する。カンボンは、西欧におけるスラムの概念と異なり、住民に相互扶助精神がある強固なコミュニティ組織が存在する巨大な「都市村落」である。（※急激に都市化が進展した発展途上国では、アノニマ的な都市形態の中に、共同体的でムラ的な作りが取り残されることがある。）スラムでは、住み手による解体と構築が為される。その中でもカンボンは、自治体・国によるカンボン改善事業＜KIP＞により、社会と関係を持つスラムとなった。社会が作り出した解体可能な都市と言える。KIPにより、カンボンがどう変化したか「人間による物質の様態変化MAP」を元に整理する。それとスラム改善事業の失敗例を比較することで、解築可能な都市・建築のシステムを考える一助となれば幸いである。

●カンボン改善事業＜KIP＞

KIPは、「スラム」の生活構造を大きく変えず、都市公共サービスと最小限のインフラの整備や材料供給を行うものである。住宅建設・インフラの維持はカンボン住民の自主性に任せられる。

●「人間による物質の様態変化MAP」から考える、KIPの成功要因

ここでは、「人間による物質の様態変化MAP」を用いて、物質面からKIPの成功要因を探ることを試みる。まずKIP前のカンボンは「社会以前に生命維持という目的に沿って出来た場所」と簡略化して見て、領域Bに位置付ける。KIPは、自治体や国が「目的＝スラム環境を改善する」に向けた「設計＝最低限のインフラ・サービス整備」から始まる。ここで生まれるインフラは領域Cに属する。それを受けて、スラム住民が「目的＝住環境を改善する」に向けた「自宅建設や環境維持」を行い、カンボンを様態変化させる。領域Cからの働きかけによって、領域Bにあったカンボンに様態変化が生まれる。そして、領域Cの

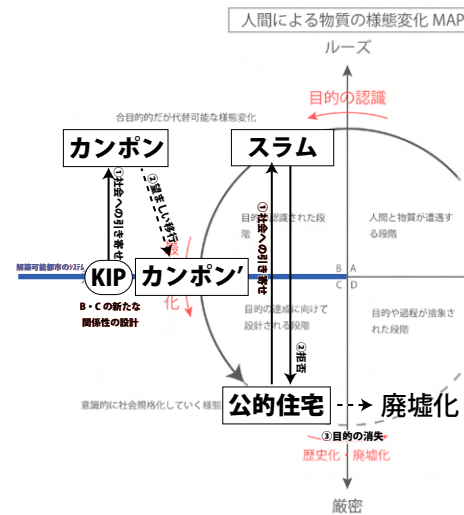


図4 「人間による物質の様態変化MAP」における解築可能な都市システム

物質と領域Bの物質が噛み合って、環境改善のされた【カンボン】を成り立たせるのがKIPなのである。KIPは、カンボンを領域BとCの境界線上に位置付けることを目指して設計されたため成功したといえる。

次に、布野がスラム改善事業の失敗例として挙げる公的住宅供給を考える。これは、「目的＝スラムの環境を改善する」の達成のために、政府がスラム住民に住宅を供給する取り組みに過ぎず、元スラム居住者の生活になじまないことがあった。この時公的住宅は、目的が捨象され、領域Cから領域Dに移動する。KIPと比較し、スラム住民が手がける物質の様態変化（領域B）を考慮していないのである。

以上より、「解築可能な都市・建築のシステム」を考案しようとする行為は、領域BとCの境界線上にどのようにして物質を位置させるか考える行為に等しくあるべきではないか。

呉雄仁／佐藤連／牧野優希／若佐歩

3. 解築学に求められる美学とは？

エドモンド・バーク『崇高と美の観念の起源』
赤瀬川原平, 藤森照信, 南伸坊『路上観察学入門』
唐木順三『中世の文学』

本項目は都市流動史において、都市の事物の時間経過における変化をどのように捉えていくか(美学)を論点とする。そして、解築学の美学的側面を検討することで、人間に元々備わっている解築の原動力や解築に対する感情を明らかにすることを目的とする。解築学における美学を考える上で、重要な視点になるのが「廃墟」である。それは人間が作った事物から目的が時間経過とともに乖離した状態であり、その事物との向き合うことは、建築物を「建てて終わり」という従来の考え方から、「建てて解いて、また建てる」という循環構造的な考え方に移行するために有用な視点になると考えられる。

本項目では、

- ①『崇高と美の観念の起源』
- ②『路上観察学入門』
- ③『中世の文学』

の3文献から、廃墟、延いては美学へのアプローチを行った。

①『崇高と美の観念の起源』

解築における美学を扱う際、人間が美を感じるものはどのようなものかについて論じられた文献として『崇高と美の観念の起源』を扱った。

廃墟化というのは、序文でも述べた通り、時間経過により人間と事物とが離れていく状態である。これは本文献の言葉で置き換えるならば、「崇高」なものと置き換えられるであろう。崇高とは、驚愕、恐怖、困難さ、を持ち、事物が自然の状態

に近い時に抱く情念だからである。一方で本文献において、人間と事物の関係を結ぶ表現として「美」がある。美とは、「大抵の場合感覚の仲介によって人間の心に機械的に作用するある事物の性質である」(p.123)、「快つまり積極の本源的な快を生み出すものは何によらず必ずそこに美が接木される適性を有する」(p.142)と述べられた。頑健さとか力強さというか外観は甚だしく美を損なう。繊細さの、否、さらには脆弱さの外観が、美にはほとんど不可欠である。鉄筋コンクリートなどによる廃墟は「美」にはならず、弱い技術的なものは「美」になる。

廃墟化は、自然に近づく行為(「崇高」)である。解築行為としては「崇高」から「美」に転換される必要がある。この転換、再構築もたらずものが何かについて、今後展開していく必要がある。

②『路上観察学入門』

路上にはさまざまな「物件」が潜んでいる。見えているが見えてない-認識されないオブジェクトを彼らは都市の中の幽霊と呼んだ。これらを収集し、自らが構築した指標によって分類分けを行っていた人物が集まったのが「路上観察学会」である。

彼らが収集した「物件」は、「無用であるが美しく保存されているもの」、「看板建築」、「マンホール」及び路上にあるすべてのオブジェなど収集される物件の範囲は多岐にわたる。路上観察学会は、美学として定められないものでさえも美学、観察の対象として捉えることのできる指標を生み出した。赤瀬川原平は、「無用であるが美しく保存される物件」を超芸術トマソンと名付けた。また、これらのオブジェクトを分類分けすることによって、物件収集の際に収集を容易とした。美学は生成されることからのみでなく、既存にある物件を観察することでさえも美学に昇華させた。

解築学は、その名の通り「解き」「築く」こと

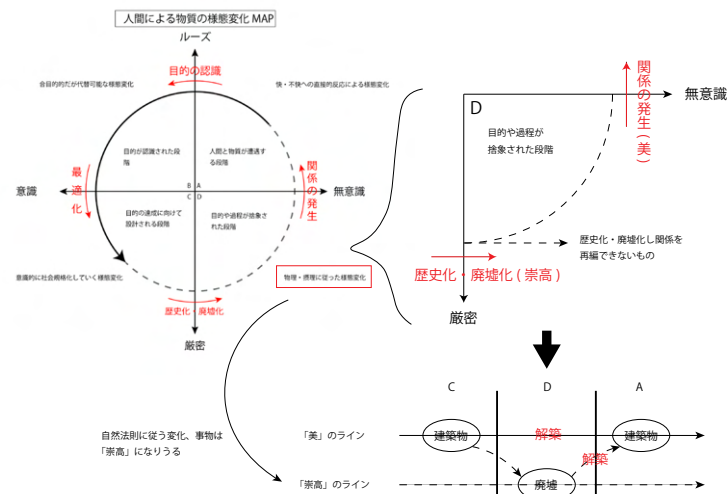


図1 従来の「人間による物質の様態変 MAP」と、C→D→Aにおける本文献の介入視点

を思考する学問であるが、これらを一般の市民に伝達するためには、理論的な説明のみならず、行為が美学としてあるべきだと考えられる。この際に路上観察学会及び、『路上観察学入門』における美学の拡張とその理論化の手法は解築学に有用である。「構築」による美学だけではなく、「解体」及び目的や過程が捨象される段階にあるもの、物件でさえも美学として捉えることができるからだ。

※物件…路上観察学会が観察するそのオブジェクトを「物件」、その物件が存在する都市のことを「空間」と呼んだ。人間によるオブジェクトの見方によって「物件派」「空間派」に分類される。

③『中世の文学』

日本の美的感覚、と言われたらなんとなく「わびさび」や「枯淡」といった言葉を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。唐木順三(1965)『中世の文学』はその美学観の歴史的な発展過程を解説するものである。

名誉や地位を捨ててまで自分の好きなことに没頭した「すき」、荒廃した世の中から気を紛らわ

すための「すさび」、そして自分たちが今歴史の途中に居ることを認識した上で再び物事に没頭する「さび」の三段階の発展は、日本人が時間の複層性に気づくとともに自分たちの好きな物事に向き合う姿勢を変えていく様子を示している。この文献の主題は美学観だが、解築的な主題はその根柢の時間の捉え方にある。さらに注目したいのが、この「すき・すさび・さび」はサイクルであることだ。一心不乱に趣味に打ち込むことや人文系の専攻に進むことが各時代でどう捉えられているか考えるとわかりやすいと思う。夢物語と捉えられがちな場合、非実用的と捉えられることに真剣に打ち込むことが不毛とされがちな荒廃した時代、つまり「すさび」の時代であることを示唆している。

解築学にはここで述べたサイクル以外にも様々な時間サイクルが存在する。時間や時代の捉え方のサイクル性を示す文献、それが解築学にとっての『中世の文学』であり、それらの認識と分析に繋がる文献である。

口石直道／関根敬介／野々村葵

2023 年度 中谷研究室 解築学 卒業論文

2023 年度は中谷研究室から 5 本の卒業論文が提出された。

都市流動史勉強会から発展させ、各々の関心に合わせてテーマを選択し研究に取り組んだ。

テーマは歴史上の災害事例から生物の巣、都市生活における諸活動を捉えようとするものまで多岐に渡った。

その事例のいずれもが、解築的な循環構造を有していると考えられた。

中谷研究室解築学卒業論文ダイジェスト

卒業論文ケーススタディ：1

ある村の災害史：共同体はいかに絶滅を
免れ集落を再建させたのか

筏千丸

pp.19-22

卒業論文ケーススタディ：2

路上観察学会はどのように美学を
生み出したのか。

関根敬介

pp.23-26

卒業論文ケーススタディ：3

郊外から千年都市を解く

野々村葵

pp.27-30

卒業論文ケーススタディ：4

生き物の巣とヒトの構築技術

森原正希

pp.31-34

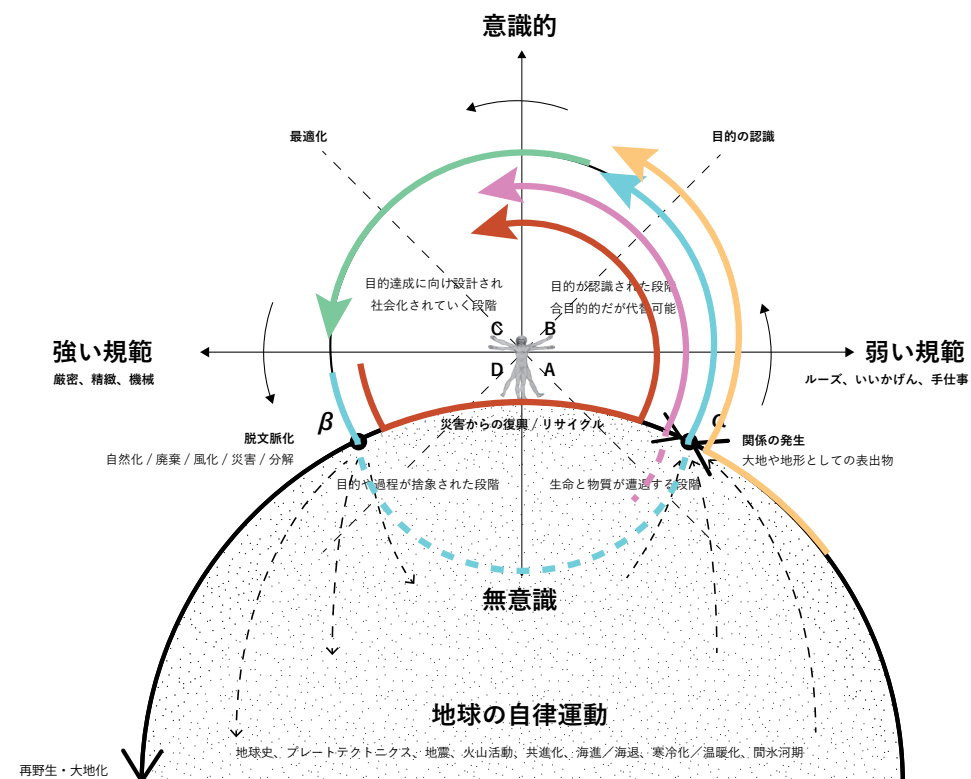
卒業論文ケーススタディ：5

震災ブラック再考

- 焼け跡からの1ヶ月史 -

若佐歩

pp.35-38



「自然と人間の物質様態変化 MAP」における
卒業論文テーマ配置

ある村の災害史：共同体 はいかに絶滅を免れ集落 を再建させたのか

—上野国吾妻郡鎌原村の事例から—

筏千丸

1. 浅間山麓の初夏

浅間山北麓の緩やかに延びる裾野の先端、1 万年以上前の火山噴火により形成された溶岩台地が吾妻川に削られ急峻な崖をなすその末端近くに、ひとつの集落が開かれている。中央を南北に貫く道路から短冊状の土地が東西に伸び、畑と家屋がそれぞれの敷地にこぢんまりと収まっている。群馬県嬬恋村の鎌原と名のつく集落の初夏は葉の出揃ったナラの木立から高冷地らしい鋭い陽光の差す心地良さだった。車通りが少なく村道からはときおり裏手の畑で農作業に勤しむ村人の姿を見かける山裾の農村である。穏やかな現代の情景とは裏腹に、実は鎌原集落の直下には江戸時代の村がまるごと埋まっている。

2. 鎌原集落の災害史

天明三（1783）年に発生した浅間山噴火は旧暦七月八日に土石なだれを誘発し、当時の上野国吾妻郡鎌原村全域を埋没させた。土砂が吾妻川、利根川を下り泥流となって江戸湾に達したほどの規模だった。この山間の小集落が研究者の注目を集めてきた歴史は存外長い。集落地理学の泰斗矢嶋仁吉は『集落地理学』（1956）において、乏水性の火山麓地域で中央に用水路を引いた開拓集落が

分布することを指摘し、その代表例に鎌原を挙げた。確かに、鎌原村は一見すると武蔵野台地の新田集落とそっくりな開拓集落の形態を見せている。俗にフィッシュボーン形と呼ばれる、集落の背骨をなす中央の用水路と村道から魚の骨のように垂直に細長い地割がなされた形態である。

しかし広大な平原を開拓できる武蔵野台地ならいざ知らず、溶岩台地末端の丘陵と崖に閉ざされた狭隘な土地は人工的な集落開発とは不釣り合いに思われる。火山活動が作り出した丘と谷が微細に入り組んだ地形に地球の運動とは別の力によってベタリと集落が貼り付けられたようなちぐはぐさ、その正体は埋没以降の鎌原村の歴史から読み解かれるべきである。

1979 年から 82 年にかけて発掘調査が行われ、現集落の直下から人骨や埋没家屋が出土したことで鎌原村の数奇な過去が明らかになった。同時に鎌原村が土石なだれによる埋没から再建されたことも実証された。土石に埋まった集落の直上で現代まで生活が続けられていることは被災後に何かしらの復興活動が行われたことを意味するからである。

3. 鎌原村の被災と一つ目の復興活動

埋没前後の鎌原村の足跡は萩原進による『浅間山天明噴火史料集成 I～V』、児玉幸多らによる『天明三年浅間山噴火資料集上・下』に収録されている古記録、古文書から復元できる。

被災以前の鎌原村には 570 人程度の人口が居住していたと推測されている。地域の中では最も大規模な部類に入る。浅間山麓では中世から軍・民の交通路が発達した。江戸時代に入り五街道その他の主要街道が幕府権力の管轄下に置かれると、民間資本は物資輸送の抜け道を求めて脇街道の開発、発展に邁進した。鎌原村は信濃と上野を結ぶ信州街道、中山道から分岐し草津に向かう草津道が交差する十字路に立地し、幕府の締め付けと活

発化する民間資本が交雑する渦中に置かれていた。民間交通路の興隆に歩を合わせ江戸期の鎌原村は農村から宿場集落へ自然と発達したというのが研究者の専らの見解である。

その村が一瞬にして崩壊した。生き残った村人は93人だった。村落共同体は絶滅の危機に瀕した。干川小兵衛という近村の名主が被災直後に生存者の身柄を引き受け自邸で扶養した。幕領であった鎌原村一帯では近隣名主が救助を差し向けるのとほぼ同時期から金銭の貸付を主とした幕府による救護策も始まった。これらの支援により鎌原村の生存者はひとまず命を繋いだ。

被災から2ヶ月後の旧暦九月には生存者が埋没地に戻って生活していたことが見分に訪れた幕府役人により報告されている。興味深いことに彼ら93人はひとつふたつの小屋に集住していた。さらに小兵衛が音頭を取りわずかに埋没を免れた土地が生存者に均等に分配された。小兵衛はその後も十一月ごろまで物資援助を続けたとされる。これらの復興活動を総じて〈応急的救援〉と呼ぶことにしよう。被災直後から十一月まで続いた即時即応で行われた種々の活動であり、青写真のないまま近隣名主や幕府役人が差し出したその場しのぎの支援である。

4. 二つ目の復興活動

九月の幕府による見分は鎌原村の再建を次のレイヤーへと前進させる起点となった。利根川、吾妻川沿いの被害村がくまなく見分され、幕府資金を投入した広域復興計画が立てられたからである。鎌原村の場合、隣村の名主黒岩長左衛門が幕府の要請を受け以降の復興活動を監督した。ここで実施されたのは埋没土を除去する起返普請と街道を整備する道普請だった。鎌原村民や近隣村民が普請に従事し規定の賃金を受け取って生活再建に充てた。〈応急的救援〉とは性質が異なり、トップダウン型の秩序と計画を持ったこの活動を〈計

画的復興〉と名付けよう。鎌原村の復興活動は幕府の広域復興計画に基づき埋没地直上での集落再建へと進んだ。長左衛門が当初は埋没地全体を再開墾する計画を立てていたことが記録に残る。しかし翌天明四年までに完了した普請は埋没地の三分の一に過ぎなかった。元人口の2割に減った村民が埋没地の三分の一を起こし返したのだから上等というべきかも知れない。いずれにせよ、以降幕末まで村の規模はこの時に整備された広さに落ち着いていた。

鎌原復興期における重要な点は、性質のまったく異なる〈応急的救援〉と〈計画的復興〉が実施時期と活動主体において重なりを持って存在したことである。いずれも近隣の名主が音頭を取り、生存者が被支援者・労働者として常に活動に参画した。それにより、再建された集落の構造には〈応急的救援〉と〈計画的復興〉が2層のレイヤーとして重なって現出している。

5. 家族の再編

93人の生存者は被災直前の鎌原村人口の2割弱に過ぎない。生き残った者も漏れなく家族の誰かを失った。前後不覚に陥った被災直後の生存者は、近村ながら被害を免れた小兵衛により救い上げられた。

江戸時代は社会階層が高度に分化した身分制社会である。一村のうちにも階級差が存在し、家格が異なれば挨拶や日常動作にも格差が表現された。その村人が生き残りのために小屋に集住することを余儀なくされた。当然、はじめは格式を尊び待遇に差を設けていたことが幕府の記録に残る。しかしすぐに小兵衛ら近隣の有力者が説得し、生存者が全員を骨肉の一族と思うようにと親族の約束を取り結んだ。

心理的な対応策に過ぎなかったが、命からがら埋没を逃れた村人の共同体を変質させるには十分な措置だった。これをもって、被災以前の村構成



図1 《夜半大焼之図》
(天明三年浅間山噴火クライマックスの様子)



図2 《鎌原村復興絵図》
(佐藤次熙氏蔵、嬭恋郷土資料館保管)

から人数が抜け落ちただけだった共同体は生存者による単一的なバンドへと変容した。近隣有力者が主導したこの出来事は〈応急的救援〉の最たるものである。しかしその影響は応急にとどまらず以降も集落の社会構成に尾を引いた。

幕府の見分を受け本格的な普請が始まると鎌原村は再び平時の統治体制に組み込まれる道をたどった。課せられた年貢やその他労役を負担するには独立経営の百姓家が十分な数確保されねばならなかった。そこで、鎌原村民は結婚や養子縁組を行い、欠落した家族同士を合流させ新たな家族を作り出した。江戸時代の統治制度は村落共同体が原始的バンドに留まることを許容せず、家族が共同体の核として制度的に組み立てられることを要求した。それゆえ、家族の再編は幕府の復興計画の一端をなす〈計画的復興〉策とも言えるが、広域復興計画を受容しつつ共同体を維持するために村民が編み出した解決策であり、多分に〈応急的救援〉の要素を残していた。

6. 集落の再建

共同体が立ち直っても物的に生存環境を確保できなければ村は絶滅の危機を脱せない。住居を構え耕作を行う集落の形態的再建が〈計画的復興〉活動の主眼だった。

土砂により埋没した過去から離れ、科学的な土地の性質から鎌原を見れば砂質の乏水性土壌であり武蔵野台地と共通する特徴を持つ。武蔵野台地の新田開発は江戸時代の初期より進められていた。元禄年間に開発された三富新田はその代表格であり、用水路の走る中央道路の両側に均等に間口をとった短冊状の地割が行われた。この集落形態が以降新田集落の模範とされた。平均割と呼ばれるこの路村形態は近世中後期には関東西部の山岳盆地でも取り入れられていたようである。当時の復興計画立案者も、乏水性地域で更地から集落を拓くお手本に平均割による新田集落形態を採用

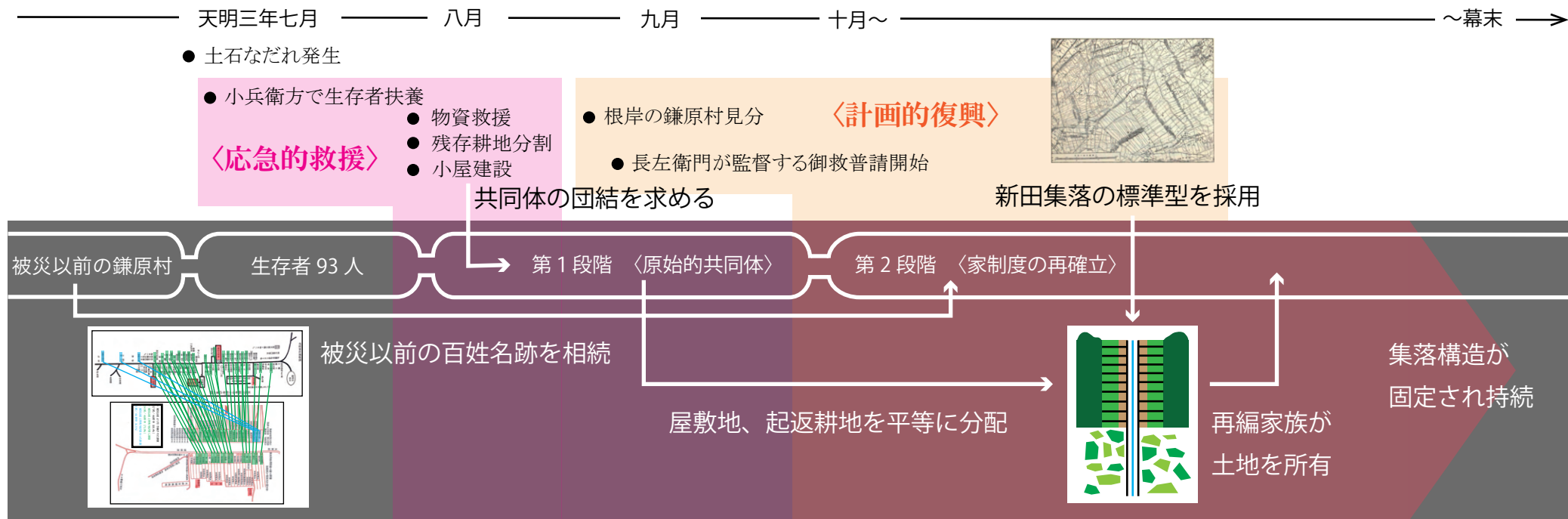


図3 再建鎌原集落の成立過程
 (〈応急的救援〉、〈計画的復興〉の2層の復興活動が鎌原村の共同体と集落形態を規定した)

したのである。それが現代に残る地割の元となった。

一方で、《鎌原村復興絵図》(図2)に見られるオレンジ色の再開墾耕地は地割が描かれず現在に至るまで不定形に耕地が分布する。村帳簿の分析から、起こし返された耕地は品質と面積が均等になるように各戸に配分されたことが明らかにされている。普請後の耕地の状況を想像してみれば、埋没深度に差があり雑多な土石が混入する耕地を図式的に平等に配分することは不可能と言っても良いだろう。家族再編後の鎌原共同体は単一バンドの性質を引き継ぎ均等な土地配分に努めた。そのためには屋敷地は幾何学的な分割で良いとしても、田畑は各所に分散した耕地をかき集めてひと家族の所有地とする方法が質量ともに合理的だった。新田集落の標準地割を採用しただけに見える集落形態にも〈応急的救援〉の影響が垣間見られるのである。

それにより、共同体の再編を経た鎌原村は新たな集落形態を手に入れた。生存者の共同体規模に合うようにきっちりと地割りされた形態である。分配された屋敷地に各家族がピッタリ収まり、その構造は容易に変化しえないだろう。山裾に拓かれた土地では集落地の拡大は簡単ではない。その分、共同体を強固に保ったまま集落形態をその後も現在に至るまで維持することができた。

絶滅の危機は〈応急的救援〉を受けることでひとまず回避された。その後、〈計画的復興〉のレイヤーが被さっても〈応急的救援〉の影響は共同体の性質に生き続けた。そうして鎌原村は共同体の自律性を維持し、埋没土の上に安住の地を手に入れたのである。

7. 鎌原村の復興と物質様態変化

ところで、鎌原集落が被災してから再建されるまでの出来事は「物質様態変化」という観点からどのように見られるだろうか。

近世社会において山間の農民の地位はあくまで低い。土地が埋没し交通が寸断されると農民は自力救済の手段を持たなかった。ゆえに社会から切り離された鎌原村の被災者は物質と同じような挙動を見せ埋没地上を漂流した。漂流していたところを小兵衛ら近隣の有力者に救い上げられた。小兵衛にとっては生存者を扶養した時点で「点α」に達し関係が発生したと言えるだろう。しかし生存者の中の誰か1人を主語にするなら「関係の発生」は全員で親族の契りをするまで待たねばならない。それ以前は構成員の欠落した元の共同体にすぎないからである。その後幕府の復興計画は鎌原村にも社会体制の「意識的厳密な適用」を求めた。けれども生存者と近隣の支援者たちは〈応急的救援〉要素を残したまま再建に向かうことで周到に「ルーズな適用」を選択した。以降鎌原村は共同体のルーズな構成を守りながら厳密に集落形態を保存した。

鎌原集落の現代の風景はそのような歴史の上に、厳密にルーズさを維持しながら残されている。

卒業論文ケーススタディ：2

路上観察学会はどのように美学を生み出したのか。

関根敬介

路上観察学会の学会員は、いかに物質を発見し、観察しようとしたのか。またそれらの収集によって体系化された美学は彼らにどのような影響を与えたのか。また、路上観察学会という集まりはどのような影響をもたらしたのか。個人の活動を元にするによって明らかにしたい。

ここでは路上観察学会（以下学会）の学会員から、現代芸術家、作家である赤瀬川原平（以下赤瀬川）、建築史家、建築探偵である藤森照信（以下藤森）、博物研究家、博物学者である荒俣宏（以下荒俣）を選定した。学会を大きく分類分けすると、芸術派、建築派、流行派に分けられる。これらを代表する且つ他の学会員との関係を記した書籍の残存量から上記三名を対象とした。

「路上観察学会」以前の個人の活動の文献資料の収集によって、赤瀬川、藤森、荒俣の活動の特徴を把握できた。そのうち、彼らはそれぞれ共通点を持っていることが明らかになり始めた。

赤瀬川原平と藤森照信 - 対本流的態度 -

彼らはそれぞれ、芸術や建築における本流とは異なる場所を主戦場としていた。赤瀬川は、1960年代の芸術業界において資本主義リアリズムが台

頭する中「資本主義リアリズム論」を打ち出し、作家活動をした。その後、「芸術作品」をオブジェクトとして制作するのではなく、身体表現を芸術とした。

藤森は、机上 - 主に書籍による歴史的建築の分析、考察にて展開していた当時の建築史研究の中で、その対象を路上に残存する明治の西洋館、近代建築に拡大した。彼らは、当時自らの業界にない態度を自ら打ち出し、活動をしていた。

藤森照信と荒俣宏 - 博物学的収集 -

彼らはそれぞれ、狂氣的な収集行為、すなわち「博物学的収集」行為が特徴として述べられる。藤森は、研究室の後輩である堀勇良とともに建築探偵を開始した。彼らは〈日本中の近代建築を見ること〉、〈すべての近代建築書を読むこと〉、〈すべての建築家の遺族をたずねること〉を目標としていた。すべての公約を達成することはできなかったが、このような姿勢を持ち活動をしていた。

荒俣は、博物学者に見られる狂氣的な収集を行った。その手法は - 独人的思想 - にも語られるところではあるが、凄まじい収集行為はいずれ体系化されることを証明した。

荒俣宏と赤瀬川原平 - 独人的思想 -

彼らはそれぞれ、他人に侵食されることのない自らのフィールド上で活動を行っていた、いわば独人的思想を展開した。赤瀬川は、自らで美学的な指標を構築した「超芸術トマソン」という概念を『写真時代』という雑誌に連載をした。ここで重要なのは、体系化された概念を誰にも侵食されることのない場に投げかけ続けたことである。

また、荒俣は、魚類及び霊を狂氣的に収集し続けた。特に、霊的なものは具体性に乏しく、収集できるものは伝聞された話のみであったが、狂氣的な収集と分析によって「幽霊」を図像として浮



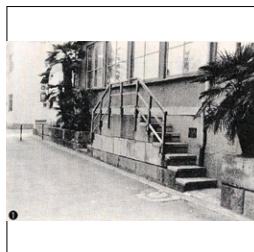
赤瀬川原平



藤森照信



荒俣宏



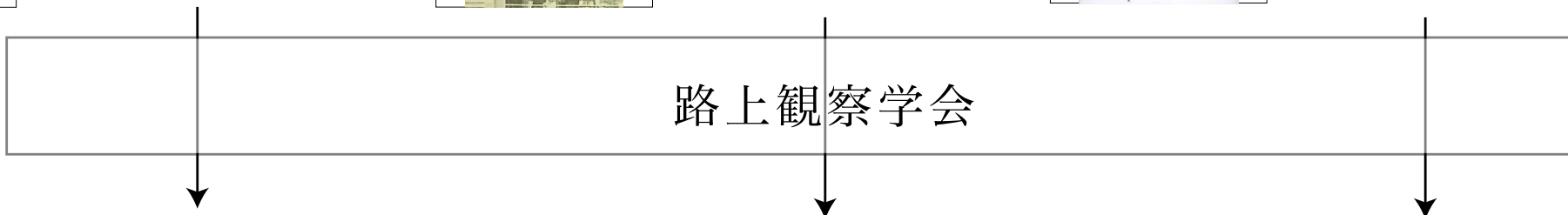
独人的思想
对本流的态度



对本流的态度
博物学的手法



独人的思想
博物学的手法



博物学的手法



独人的思想



对本流的态度

図1 路上観察学会の前後の活動と相互的な影響について

かび上がらせた。

赤瀬川には博物学的収集、藤森には独人的思想、荒俣には対本流的態度が他の二人と比較して劣っていた。しかし、学会を経ることによって、これらの特徴が見えるようになった。

赤瀬川原平は博物学的収集を獲得した学会員であった。学会以後に「ルポ」、身の回りにある普遍的な風景を事細かく記述する行為を開始した。

また、藤森照信は独人的思想を獲得した学会員であった。学会以後建築の設計を開始した。初期作には、神長官守矢資料館、自邸のタンポポハウス、赤瀬川邸のニラハウスなどが挙げられる。建築設計行為を建築家の思想の表れとして捉えるのであれば、ここに、藤森なりの思想が表出していると考えられる。建築設計以前では、すでに構築された建築を丹念に収集することが主な活動であり、ここでは藤森特有の思想は表出していない。学会以後に藤森が建築設計行為を開始した理由は、施主からの依頼と同時に「自然における人工物（建築）のあり方」と「都市における自然のあり方」を考えたことにある。都市を観察する中で、自然が人間から都市のものに乖離していることを発見したことが契機となる。

最後に荒俣宏は対本流的態度を獲得した学会員であった。博物学研究家、博物学者として収集活動を行っていたが、これらは自らのフィールドで展開されるのみで、対外的な活動とは言い難いものであった。しかし、路上博物倶楽部※の活動の以後、学会の活動の途中にカドカワ・ノベルズから『帝都物語』を刊行した。これらは、10巻にまで拡大し、映画化までされた。

『帝都物語』は、明治終盤から昭和74年までの帝都東京を「造る」人間と「壊す」人間の二視点から描き、1980年代当時の都市を末期的な廃墟として捉え、元号と都市の終末までを創造した。特に「壊す」いわば破壊行為に目を向けたことは、

革新的であった。帝都物語では、都市を半ば独断的に作る人間としての官の人間と江戸の東京が破壊され、ナショナリズム的に創造される都市を破壊しようとする地霊の間を捉えた。「社会」、官によって構築される都市が、民のためではなく、日本、ひいては世界規模での立ち位置を定めるためのものになってしまったことを暗喩している。

以上から荒俣の活動において本著作は、「社会」という大きな流れに対して対抗するものとして捉えられるだろう。自らのフィールドの内部のみで完結するものとして執筆していたか証言はないが、いやはや、多くの人が本著作及び映画を鑑賞することによって、少なからず都市に違和感を覚えただろう。自らのフィールドにて構築した独人的思想に、学会での都市のオブジェクトの観察行為を通して得た都市に対する違和感が付加されることによって社会という大きな流れに相対する態度を打ち出したのである。

※路上博物倶楽部…藤森が荒俣とともに路上の全てのオブジェクトを収集することを目的として結成された団体。路上観察学会の前身団体として位置付けられる。

「自然と人間の物質様態変化マップ」と「路上観察学会」の美学

ここで、今年度の解読学ゼミにて制作された「自然と人間の物質様態変化マップ」を参照しよう。

彼らは、D（目的や過程が捨象された段階）の物質を発見、観察することによってα（関係の発生）を行った。これらは、観察者によって構築された美学観念によって体系化された。これらを行った人物が集合した学会は、C（目的達成に向け設計され社会化されていく段階）いわば、彼らの美学が社会に適用されようとしたのである。

しかし、意識的に適用されることによって体系化された美学は、陳腐化し消費されるものとなってしまった。しかしその一方で、個人は、他の学会員から獲得した姿勢、思想、態度によって新た

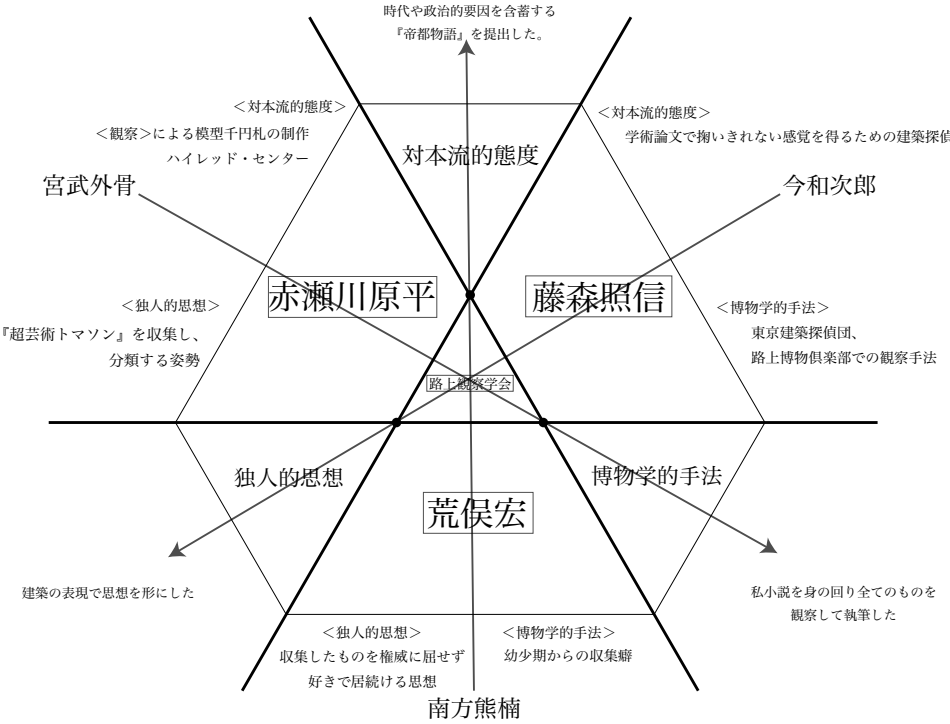


図2 学会員の路上観察学会前後での姿勢の異なりについての図

に α （関係の発生）を行った。個人で見ると、常に関係の発生から目的が認識された段階を走り続けたのである。ここで学会は、共同意志を持たず、あくまでも観察家の集合体であったことが重要である。

これから体系化されるであろう「解築学」であるが、その一方で、そこからこそ落ちた小さく儚い事例にも丁寧に向き合うことが解築学には求められるだろう。

卒業論文ケーススタディ：3

郊外から千年都市を解く

野々村葵

大徳寺というお寺をご存知だろうか。京都市北区にあるこのお寺の周辺は紫野と呼ばれ、いつでも観光客で賑わっている京都とは思えない異様な静けさが広がっている。平安時代の船岡紫野は後述の通り特異な役割を担っていたのだが、その理由は明確である。この地域南端の船岡山は朱雀大路の北延長上に位置し、平安京の起点ともいわれるのだ。そんな船岡紫野がどうして現在の閑静な住宅街へと変化したのか、その変遷を「葬送」「祭礼」「大徳寺」の3要素から追い、横断分析を通して対象の役割の変遷と実態を考察している。

1. 船岡紫野の千年

ひとまず船岡紫野の変遷の概要を述べる。文字数の都合上かなり省いているので、できれば参考文献を参照されたい。特に、本多健一（2013）『中近世京都の祭礼と空間構造』や河音能平（1984）「ヤスライハナの成立」は事前知識がなくても読み物として楽しく読んでいただけたと思う。

平安前中期の紫野は都市と自然の中間地、行楽と葬送が両立する異界、皇族のみの禁野であった。それに対し、船岡は平安京住民に身近な異界の出入口であった（図1）。10世紀末には都市住民が御霊会を主催するも、朝廷が介入し紫野御霊会と

して定期的に開催されるようになった。それが根付き、今宮神社となった（図2）。

荒廃した平安末期において特筆すべきは夜須礼（ヤスライ）である。これは1154年に貴族が大衆を巻き込む形で行った今宮社での政治デモであり、参加者は現役左大臣と彼の悪政を都市の疫病とみなし、疫神同様封じ込めようとした。疫神送りが都市問題の解決策から都市住民にとってのパフォーマンスへと変化していた証明である。そして、船岡は都市住民にとって都市内部の問題を訴えるためのパフォーマンスの場として変化していたのだ。（図3）

14世紀に入ると今宮祭は都市住民のための祭礼に変化し、ヤスライは郷の民の祭礼へと変貌した。同時期には紫野に大徳寺が開堂し、様々な権力者から厚遇された（図4）。一時は五山一位にまで登り詰めた大徳寺だが、室町幕府の台頭で幕府の権力下から離れ、公家側につくようになった（図5）。

応仁の乱で中断され、幕府の後援を受けて復活した今宮祭に対し、ヤスライは後援を受けた記録はない。都市祭礼と郷の祭礼の対比である。また、当時の大徳寺は外護者の有力大名や豪商が禅と茶の湯を媒介に交流し、朝廷から五山一位並みの権力を与えられるなど、政治的価値溢れる場所となっていた（図6, 7）。

江戸時代に入ると大徳寺は幕府の権力を証明する道具のようになってしまう（図8, 9）。二つの祭礼はあまり変化せずに現代まで続き、船岡紫野はそれらを見るための洛外の観光地として扱われた。しかし、明治維新直後に元公家が大勢移住したことで船岡紫野はとうとう大衆感情の示す都市領域にも取り込まれ始め、昭和中期に宅地化が始まったことで完全に都市の内部になったといえる（図10, 11）。

2. 変化するアジュール、紫野

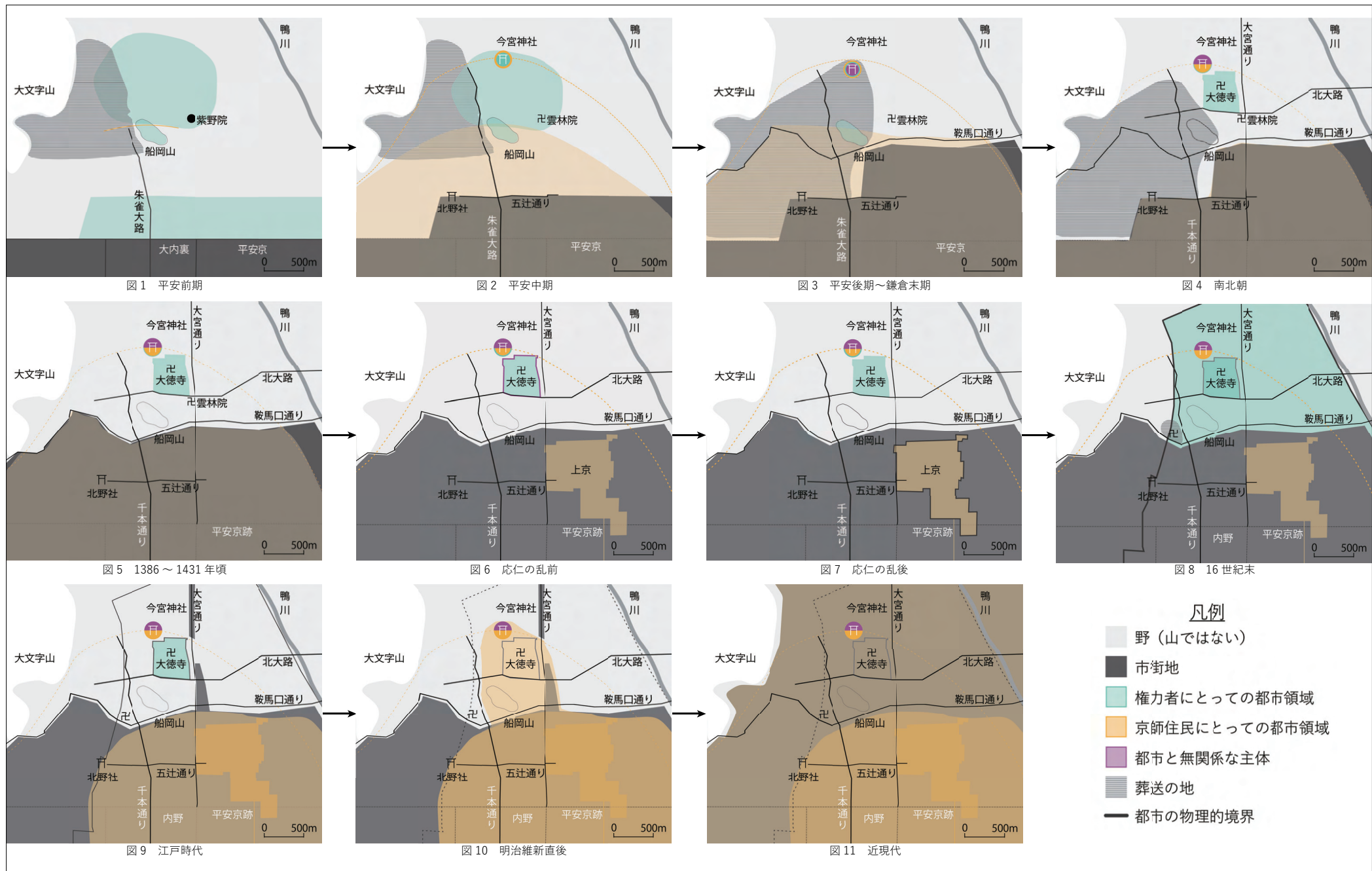


図1 船岡紫野の都市領域の変遷

行楽と葬送の両立が崩れ、行楽地であった紫野に大徳寺が開堂し権力が集中したことから、紫野の「ケガレと無縁性を持つ」性質が薄れ、都市と農村が共存していることは、今宮社がその区分と無縁性を持つことを示唆する。

政治の中心が江戸に移ったことで、権力者のみの都市空間として続いてきた紫野から権力者が消え、構成要素の空洞化が起こった。紫野の役割は平安時代には「触穢思想からのアジール」、中世には権力者が従来の格式を無視して出世・交流できる「格式からのアジール」、近代には元公家らが住む、洛中の自治の喧騒を持たない「大衆自治からのアジール」と変化したのである。

3. 解築学と都市領域

本論文は、星野ら（2000）が「アジール性」（1）と名付けた船岡紫野の特性がどのように変化したかについて論じている。別の言い方をすれば、船岡紫野という郊外が隣接する都市内部の社会によって「解」かれ、再構「築」されるサイクルを見出しているのである。洛中の民衆が船岡紫野に見出している役割が、権力者と大衆、洛中と洛外、寺院と神社といった様々な尺度が重なった複雑な変化を遂げている。

「大地と居住の長期間にわたる動態」（2）を全ての要素から網羅的に述べるのではなく、京都の複数の都市領域を表出させるために必要な要素にのみ注目しているため完全にはとはいえないが、本論文は都市領域論に含まれると考える。本論文は、船岡紫野地域が郊外として果たした役割を考察することで隣接する都市の変化を示す、ある意味逆説的な研究なのである。そして、資本主義の台頭に伴う都市の膨張から生まれた解築学において、都市の変動についての理解を深めることは解築議論の基礎となるだろう。

船岡紫野の地理的条件から始まり現代までの変遷を辿っている本論文は、巻頭の「自然と人間の物質様態変化 MAP」の特定の一点に置くことはできない、と思っている。置くとしたら意識的適応の点 α から点 β の直前までを辿る矢印、だろうか。都市の外側で積極的役割を持つことをやめ、その内側で閑静な異質さを持つようになった船岡の変化は、都市にとっての最適化を過ぎた段階にいるといえるだろう。

郊外が元の特別性を失うことを衰退と捉えるならば、本研究は地域の衰退の影響と可能性というテーマを投げかけるだろう。しかし、私は船岡紫野が衰退したとは考えていない。確かに、船岡紫野は京都の他地域に比べて明らかに観光地化が進んでいない。しかし、それは船岡紫野が衰退し京都全体に付与する価値が減少したのではなく、都市的な動乱や喧騒である表層の一つ下の静かな層が表出しているからだ、と考える。「すき・すさび・さび」の「すさび」で注目された主体的・偏執的情熱を超えた法悦（3）、喧騒の下にある、そういった絵画的ともいえる時間的超越性と社会性を併せ持つ地域、それが京都における船岡紫野なのではないだろうか。

解築学において衰退論が不要だと言いたいわけではない。むしろ、空き家や廃墟、過疎地域問題の深刻さからみて今後さらに力を入れるべき分野である。しかし、本論文は郊外の衰退ではなく、郊外の役割の変遷から都市の構成の変化に注目するものであり、人間社会と自然の時間のサイクルが別物であるように、人間社会の時間のサイクルも複数存在し、一つのサイクルの別の要素が同時に表出する可能性もあることを指摘するものである。時間と切っても切り離せない解築学において、時間進行の複層性の理解を少しでも深めるきっかけとなる研究であるように思う。

卒業論文ケーススタディ：4

生き物とヒトの構築技術

森原正希

● 建築家としての生き物

一歴史家たちは最初の 50 世紀をとばしてしまい、私たちに向かって、ただいみじく「様式的」な建築の盛装した行列だけを示す。建築芸術がこんなやり方で解説するのは、たとえば交響楽団の出現によって音楽芸術が始まった、と言うのと同じくらい気まぐれなことである。（中略）時には百世代にもわたって受け継がれてきた住居やその中で用いられている道具の形態は、永遠に有効であるように思われる。一

B・ルドフスキーは、西洋中心主義的なモダニズム建築を批評し、建築史家として捉えることができていない数百世紀の時間軸における建築の可能性を示そうとした。彼の著書である「建築家なしの建築」は西欧中心の近代建築以前、まさに未開の地における無名な「ヒトの巣」の発生や技術を取り上げていることで、建築の原初性、起源性に踏み込もうとしたと言えるだろう。同時に、彼が射程として見ていたのはヒトだけではない。動物達や生命体の作るの構築物についても言及している。彼は「ビーバーは人類の行うダム工事を見てからダムをつくりはじめたわけではない。おそらく人類の方がビーバーの真似をしたのだろう」

とのべ、ヒトと動物は両者が同じ要求と同程度の理性をもっていた結果として、地球上における構築物の起源性を動物達に見ている。そして、力強く地球と共生的な関係性を続ける動物達の作る構築物を、百世代に渡って受け継がれている住居形態を道具として再評価するべきとし、さらにそれらの技術は永遠に有効であると述べている。

しかしながら、建築学における歴史家たちは、その再評価の必要性へ具体的に踏み込もうとしてこなかった。布野修司は「これらの動物が示す精巧な造巣行動のほとんど全ては遺伝的にプログラムされたものである」と述べ「ヒトの場合、住居をつくる技術は、遺伝的にプログラムされていない。98.8% 遺伝子が同じだというチンパンジーは住居をつくらないが、1.2% の DNA の違いに住居建設の能力に関わるということではおそらくない。20 世紀に至っても、裸のままで 1 万年前と同じように暮らす人がいたということは、住居の建設能力は遺伝的プログラムに依存するより、経験と学習、文化に属するということである（A. ラポポート（1987））。」と述べ、プリミティブな造形的特徴は類似するが、ヒトと生き物の住居や建築の構築技術能力の差分は経験と学習、文化に属し、明確な差異があるとしてきた。

しかし、生き物の構築物とヒトの構築物相互において形態的類似性を認めざるを得ない時、その技術的な進化の形は類似している（していた）と考えられるだろう。どこかの段階において、なぜか我々の文明圏が生き物の構築技術や文明圏から離脱したと捉えるのが妥当であり、構築物の構築技術の進化プロセスが人間が独特で、ヒトの経験と学習、文化のみが優位に働いてると安直に求めることはできないのではないだろうか。むしろ我々が認識することのできない文化圏や言語圏の存在、構築技術の発達条件が存在している可能性があると考えられるはずである。

●百世代の表現型としての累積淘汰

生き物の構築物について具体的な言及を始めたのは、実は建築学だけではない。生物進化学や動物行動学、遺伝子学においては、動物達の行動に影響を与える巣の造形的、立地的な条件は高い可能性で何らかの相互連関がある可能性があることが示唆されてきた。なぜどのようにして生き物達は巣が幾何学的に美しくまたは機能的な状態で構築、維持、継承され続けるのかという巣の発現の理由を求めてきたのである。

中でも「利己的な遺伝子」で一般的に著名なりチャード・ドーキンスは「延長された表現型」という言葉を用いて、生き物の巣（ドーキンスは「動物における造作物」としている）の遺伝的発現についての理論を提示している。「延長された表現型」では、遺伝子はそれを保有する生物の身体を超えて外部に自らの形態を発現することができる。例えばビーバーのダムは、ビーバーの遺伝子の「延長された表現型」の効果の形である。さらにビーバーの構築するダムによって周囲の環境も変化し、そこに暮らす動植物にも影響を与える。これらの影響や環境もすべて含めてビーバーの「延長された表現型」であるとドーキンスは論じている。つまり、ビーバーが誰からの指導や書物等の伝承的な行為を行わずともダムを作り湖を作り環境を改変し表現型を与えることと、身体的な特徴として発現し、表現されることは同じであり、どちらもビーバーの「遺伝子の顕示」であり、あらゆる巣は各々の生き物達の「遺伝子の顕示」の形であり、巣などの構築物は遺伝子が「サバイバル・マシン」として潜在的に自らを次世代へ後押しするための表現型上の外部的道具と説明できるのである。

生き物の巣の構築物には明らかに高度な技術やデザインが存在していることは確かである。（未だ我々の科学技術では説明され得ないものも多々ある。）これらは進化論においては批評の対象と

され、高度な技術やデザインが遺伝子の発現や、突然変異によって起こることはありえないとされてきた。ドーキンスはこの批評に対して、累積淘汰という概念を提示している。

飛んだり、泳いだり、樹から樹へ飛び移ったりなどなど、生きるための方法が数多くあるというのはそのとおりである。しかし、たとえ生きていく方法がいろいろあるにしても、死んでいる方法（もしくは生きていない方法）にはもっといろいろあるというのは確かである。あなたが10億年ものあいだ何度も何度も繰り返して細胞をでために寄せ集めても、飛んだり、泳いだり、穴を掘ったり、走ったり、ほかの何かをしたりする大きな塊は一度も得られないだろうし、悪くすると、自らを生きたままに保っておけるとわずかにでも思われる塊すら現れてこないだろう。

つまり、生きている方法よりも死んでいる方法の数の方が多く、小さな進化を累積していく過程を経て（つまり死んでいる方法を積み重ねながら学習し）累積淘汰され、百世代後に優位なデザインの違いにたどり着いた時、生存を維持できている可能性は非常に高いということだ。巣はまさしく数百、数千世代の累積淘汰の結果の形態や技術と言えるだろう。動物は、我々現代人のように更地を作り、ゼロから構築する作業ではなく、動物達の構築とは、あるフォーマットや前世代の修正や継承をしながら行う構築なのである。累積淘汰では、どんなささいな変化さえも一つ一つの改善の結果が将来の構築や技術拡張のための基盤として使用され続ける。これは、B・ルドフスキーが述べた百世代の継承物の永遠の有効性と同様の事実であり、また、私たち現代人の建築行為はなぜか動物的な構築手法や永遠に有効な技術構築から離脱していることを認識できるだろう。

●ホメオスタシスとニッチ構築



図.1(上)Compass termite(オーストラリア)
内部の気温を一定に保つ換気システムの役割を持った高さ3mのシロアリの巣。まるで乱立する高層ビルのような風景である



図.2 ミナミベニハチクイの巣
多種の鳥類が木々の上に営巣するのと同様な形式ではなく、簡易的でインスタントな穴居を選択したミナミベニハチクイ。柔らかな大地を穿、簡易的でインスタントな穴居を構築する。



図.3 ツムギアリの巣
ツムギアリの巣は自身が作り出す半透明の糸によって葉っぱ同士をつなぎ合わせて構築され、300枚ほどの葉を重ね合わせて、中の一部をくりぬいて部屋を作り巣が完成させる。小型の働きアリが幼虫を使って部屋の中に糸の床や糸の壁を設置し、さらに住みやすいように改造する。まさに柱梁のない天幕住居の形態に近い技術を持つ。

J・スコット・ターナーはドーキンスを引用しつつも、ドーキンスの遺伝子の顕示とは違い、巢などの生物が作る体外構造は彼らの生理的器官の一部であり、生き物の身体的な適応的限界性を補填するため自然エネルギーの流れを変える技術力の表現であるとする。ホメオスタシスとは恒常性とも言い、生物のもつ重要な性質のひとつで生体の内部や外部の環境因子の変化にかかわらず生体の状態が一定に保たれるという性質、あるいはその状態のことである。そして生き物は特定の遺伝子の自然選択によってそのようにデザインされたのではなく、ホメオスタシスの作用因によってそのように作られてきたのであるとし、シロアリの巣の形態をホメオスタシスの作用因の結果として例に挙げている。例えば、シロアリは巨大な空気循環のための煙突を作る。煙突を作るアリの巣は風によって換気され、塚を築くシロアリは集団的な代謝を利用して、塚の中の空気を循環させ続けている。ターナーはここで、シロアリの巣はそれ自体が「生きた機能」であり、換気の機能に対する物理的な構造ではなく、巣の形態自体が実体化した生理機能であることを発見している。つまりは、生存に必要な部分的機能の集成的な形態がシロアリの巣の形態なのではなく、全体の構造形態がそのまま機能の表現であるということである。

ジョン・オドリン＝スミューは、自然環境は、気温、湿度、塩分濃度といった物理的な要素を通して生き物の自然選択の実行者として選択圧を振る舞う存在ではなく、環境自体が生き物達と共に変化する、つまり「共進化」する存在であるとして「ニッチ構築」を提唱する。ニッチ構築の例として、シュウカクアリのコロニーが作る「ヒューヴァルキー」はアフリカンス語で「小さな丘」を意味し、平均寿命約1200年、一部のものは4000年まで遡るとされる。ヒューヴァルキーの永続性はシロアリ・土壌・気候・植物・捕食者たちが関係する自己永続的な生態系循環の結果として生じて

いる。その結果としてヒューヴァルキーの土壌は、周辺の土壌よりも常に湿った状態となっている。そして多肉植物や、多年生アスター菌、イグサからなる豊かな植物群が成長し、その豊かな環境はモールラットのような地下生物に対してすみ良い土壌を提供する。また、ヒューヴァルキーに存在する豊富なシュウカクアリを求めてツチブタやツチオオカミなどが頻繁にやってきて土壌を掘り起こし、雨水の浸透と維持が促進されるのである。このように湿った土壌が自己永続性の条件となる。このように、生き物は周辺環境に対して能動的に働きかけ、関係性を丁寧に築き上げる存在であり、決して自然選択的な自己の生存確率を高めようとするサバイバルマシンでもなければ、遺伝子のみによる構築物のプログラムの組成により生み出されるものでもないのである。少なくとも我々現代人よりも大地や他種と共生的な環境を築いている。

● 古代文明としての生き物の構築技術

生き物は「既に起こった出来事や身体に近い素材を用いて構築物をつくり、都度改善する」累積淘汰の過程により、構築技術進化をさせ、人間と同等か、それ以上の生き物も並外れた技術を保有している。ミツバチは民主主義を少なくとも我々よりうまく使い、シロアリは数千年以上構築物をニッチにおいて使い続け、ツカツクリはすでに微生物を利用したエネルギー利用を行い、大地と共生的関係を築いている。生き物たちのその構築技術を丁寧に観察し、我々ヒトとの類似性を見つけようすると、決して下等な生物ではないことがわかる。彼ら生き物達が現在も保有する構築技術やニッチ構築環境は、我々が未だ認識や理解の及ばない「古代文明」であり、人新世の時代に必要なグレートブリコラージュの様相を感じさせる。生き物達を建築家として招かないまでも、同様な構築技術者として扱う必要は大いにあるだろう。

卒業論文ケーススタディ：5

震災バラック再考 - 焼け跡からの1ヶ月史 -

若佐歩

私たちは自分の身のまわりの平凡なものごとに疑問を持つということに慣れていない。誰でも家屋のなかに住んでいて、そのおかげで生活を営み、暮らしをたてているのであるけれど、量にすわるなり、いすに腰かけるなりして、天井から壁、建具、床とじっと見回したとき、そもそも誰が家というものをこんなふうに造ることを考えたのかと思うことなどについては、おそらく、うっかりしているのが普通でしょう。

住居論 | 今和次郎

これは民家研究や考現学で知られる建築学者、今和次郎の言葉である。この文章を読んだ後、自分のいる空間を改めて眺めてみると、これまで慣れ親しんでいたはずの壁や柱が全く違う印象を与え始める。なぜここに柱があるのか？この部材に意味はあるのか？椅子は？照明は？彼はこのような視点から住居を含め、人々の暮らしを徹底的に調査し、生涯をかけて研究していった。

彼が住居の根源を考えるようになったきっかけの1つに、関東大震災がある。関東大震災は今から約100年前の1923年9月11日に発生した。住居への被害は37万2659棟、死者・行方不明者数

は10万5385人であり、日本災害史上最大の人的・物的被害をもたらしたと言われる。特に二次災害としての延焼火災による被害は甚大で、当時の市街地の約4割が焼き尽くされたという。火災から逃れようと、100万人以上の人々が公園などの広場に逃げこむこととなった。人々はかろうじて生き延びたが、帰る家を失い、ほとんどの家財も焼失した。まさに身一つの状態で生きていかねばならなくなったのである。現代であれば公的な支援が確立しており、多くの場合それに従って復興していくこととなる。しかし当時は国による支援は乏しく、自力でなんとかするほかなかった。結果的に多くの人々は、焼け跡から拾った材料を用いて、自力で小屋を作って復興していくこととなったのである。今和次郎は当時田舎で民家調査を行っていたが、都会に田舎で見えるような小屋が建てられている状況に驚き、それらを調査してまわることにしたという。震災から数週間後の東京を歩き回り、あちこちに建てられた小屋をスケッチとして採集していった。彼の調査は後に論考として発表され、震災バラックの実態を調査したものとして、現在でも参照され続けている。

彼以降多くの研究者が震災バラックを研究してきたが、その多くは区画整理事業など、復興がある程度進んだ段階での住居を扱うものであり、その姿は震災直後に見られた小屋とは大きく異なる。あの小屋たちがしっかりとした住居に変化するまでに何があったのか。震災バラックという言葉の揺れ動くイメージを確かなものにしたいと考えたところから本研究は始まった。そのための中心的な史料として用いたのは、今和次郎が調査時に撮影していた写真である。ここにはスケッチとして論考に掲載されていない住居も数多く写されている上、一部には撮影日と撮影場所も記されている。ここから無名の住居の変遷を探ろうと試みたのである。史料に残された日付は、9/20、

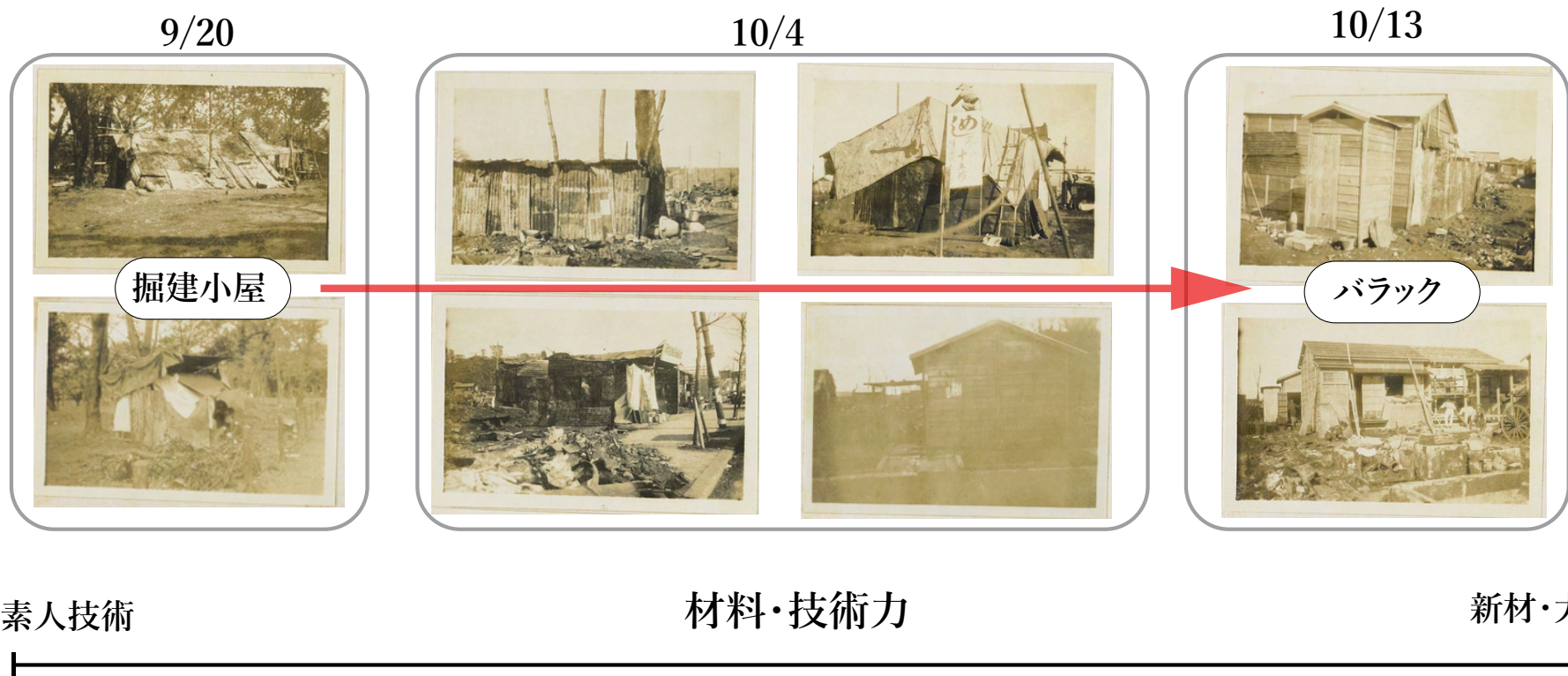


図1 材料・技術からみた住居の変遷

10/4、10/13の3日間であり、これらを比較して見ていくと、ある一定の傾向が浮かび上がってきた。

9/20の時点では、多くの住居が焼け跡から拾ってきたトタン板を主な材料としているが、10/4になると、一部に新たな木材を用いたものが見られはじめ、10/13には木材を用いたものがほとんどとなる。東京市（1927）によると、ちょうどこの時期、9月中旬頃から各区によって被災者への建材供給が始まっている。多くの被災者はこの時期に初めて、廃材以外の選択肢を選べるようになったのだろう。そして十分な数の木材が手に入ると、しっかりとした板張りの住居を建てられるようになる。しかし材料があれば板張りの住居が完成するかというと、当然そうではない。そこには訓練された大工の技術が必要だったはずである。写真を見ると、9/20の時点では多くの住居が今にも潰れそうな様子だったが、10/4、10/13になるとしっかりと自立し、明らかに大工技術を用いていることが分かるようになってくる。また当時の新聞を見ると、9/10には東京の大工が焼失した大工道具を購入していること、中旬ごろには各地から需要を見込んだ大工が集まってきたことが報じられている。これらを総合して考えると、材料においても技術においても、9月中旬が建築生産システムの復興におけるひとつの転換点であり、そこから少し遅れて住居に変化が現れ始める、ということが言えそうである。そしてその変化にも一定の傾向がある。震災バラックは、素人が廃材を用いてこじんまりと建てたものから、大工が新材を用い比較的大規模に建てたものへと移り変わっていったのである。本研究においては、前者を「掘建小屋」、後者を「バラック」として表現した。今和次郎のスケッチしたような「掘建小屋」は震災からおよそ一か月で消滅し、「バラック」へと建て替えられていったのである。



図2 大量のトタンを使って大規模に建てられているように見える



図3 建築物の壁面から屋根までをトタン板で包んでいるように見える

しかし「掘建小屋」から「バラック」という一連の発達過程を意識して写真を見ていくと、明らかに一連の流れから逸脱している2種類の建築物があることに気付く。図2の建築物は10/4のものだが、廃材を使っているながらも他の建築物よりも明らかに巨大である。また図3の建築物は10/13のものだが、外壁や屋根を金属板で覆い隠しているように見える。このような逸脱がなぜ起こり得たのか、その背景を探ってみたい。まず図2についてだが、この建築物の特異性を考えると、その場所に1つの特徴がある。他の写真は上野周辺で撮られているものが多い中、この写真と他数枚は芝区愛宕山周辺で撮影されている。先ほ

ど100万人以上の人々が公園に避難したと述べたが、実はその約半数の50万人は上野公園に避難していた。一方で芝公園への避難者は約5万人と、上野公園と比較すると圧倒的に少ない。このことから推測するに、芝周辺においては被災者1人あたりの利用できる廃材が比較的多かったのではないだろうか。集めた焼トタン板をふんだんに用いて、自らの住居をどんどん増築していった、そう考えると、この巨大さにも説明がつくだろう。次に図3についてだが、まず考えられるのは防耐火性能を増すための被覆であるということである。しかし当時の法律において、壁面の防耐火基準は板張りの時点で既に達成できている上、法的に認められた耐火構造に金属被覆は含まれていなかった。一体どうしてこのような建築物が存在しえたのか。手がかりは、類似した金属張り建物の研究を調べている中で見つかった。江面（1990）は中央区佃町に残存していた住居を調査し、その中に外壁を銅板張りとしたものを発見している。そしてその動機として、金属板の防火性能が一般には認められていたこと、そして当時法的には認められていたモルタル塗が一般に浸透していなかったことから、建て主が自主的に防火手段の1つとして銅板張りを採用したと結論付けている。今回は銅板でなくトタン板だが、同様に説明できるのではないだろうか。震災直後ということもあり、当時の被災者にとって火災に対する恐怖心は相当に大きく、それが住居に防耐火性能を求める動きにつながることは容易に想像がつく。その流れと建材の不足が相まって、全体を手に入りやすいトタン板でくんだような建築物が発生するに至ったのではないだろうか。

ここまでの分析を振り返ると、興味深い傾向が見えてくる。「掘建小屋」にしろ2種類の逸脱にしろ、そこには材料や技術の欠如が介在していた。もし材料や技術の復興がもっと早い段階で進んで

いたなら、あるいは被災者たちがそれらの復興を待ってから焼け跡に復帰したなら、彼らの建てる住居ははじめて「バラック」のようなものになっていたことが推測できる。これまで今和次郎をはじめとした多くの人々が、いわゆる掘建小屋やバラックに興味深い対象として観察し、時に研究対象としてきた。その興味深さの背景には、震災によって揺るがされた建築生産システムの影響が大きく表れていたのである。

最後に「自然と人間の物質様態変化 MAP」において、本研究はどの部分に位置づけられるだろうか。焼け跡から廃材を拾い「掘建小屋」を構築する行為は「関係の発生」が起き、「目的の認識」に至った段階と言える。そして「掘建小屋」が「バラック」に移り変わっていくことは、「最適化」の結果であると言える。実際「バラック」は「掘建小屋」よりも明らかに厳密なものであった。つまり震災発生から「バラック」が建つまでの約1か月は、「最適化」されていた建築物たちが震災によって「脱文脈化」され、再び「最適化」に至るまでの過程だったのである。そして先ほど見た2種類の逸脱は、「最適化」とは別の方向に向かって進む動きとして考えられる。それはルーズさを保ちながらも、より意識的になっていく動きである。どちらも材料や技術の欠如があったことで、「最適化」できない中で工夫するという道をとらざるを得なかった。ルーズでありながらも意識に答えていかなければならない、その工夫こそが震災バラックの興味深さの真髄なのではないだろうか。

特記事項

今和次郎バラック写真の原典は工学院大学に所蔵されている。本研究においては卒業研究のために工学院大学から画像データの提供を受け、それを用いて研究を行った。

出典・参考文献

■自然と人間の物質様態変化マップ

参考文献

日本建築学会地球環境部門（2023），「人新世時代における気候変動への建築・都市・地域の応答」

ハンナ・アーレント（1973），『人間の条件』，筑摩書房

マクダナー W, ブラウンガード M（2002），『サステイナブルなもののづくり ゆりかごからゆりかごへ』，人間と歴史社

■都市復興史、あるいは日常的復興史

図版出典

図1 <https://oac.cdlib.org/ark:/13030/hb5n39p1bm/?&query=restaurant&query-join=or&brand=eqf>

図2 <https://oac.cdlib.org/ark:/13030/hb5d5nb4ck/?&query=street%20kitchen&query-join=or&brand=eqf>

図3 ケヴィン・リンチ（1994），『廃棄の文化誌』，工作舎，p.175

図4 ケヴィン・リンチ（1994），『廃棄の文化誌』，工作舎，p.166

参考文献

レベッカ・ソルニット（2010），『災害ユートピア』，亜紀書房

ケヴィン・リンチ（1994），『廃棄の文化誌』，工作舎

福岡亮大（2013），『復興文化論』，青土社

■バラック・スラム史

図版出典

図1 今和次郎著，川添登他編（1971），『今和次郎集』第4巻（住居論），ドメス出版，図75

図2 同上，図69

図3 同上，図72を元に佐藤作成

図4 呉作成

参考文献

今和次郎著，川添登他編（1971），『今和次郎集』第4巻（住居論），ドメス出版，pp285-336

田中傑（2006），『帝都復興と生活空間』，東京大学出版会

ジョージ・クブラー著，中谷礼仁，田中伸幸訳（2018）『時のかたち』，鹿島出版会

松村秀一（2016），『ひらかれる建築：「民主化」の作法』，筑摩書房

布野修司（2021），『スラバヤ 東南アジア都市の起源・形成・変容・転成：コスモスとしてのカンボン』，京都大学学術出版会

■解築学に求められる美学とは？

図版出典

図1 口石作成

参考文献

エドモンド・パーク著，中野好之訳（2021），『崇高と美の観念の起源』，みすず書房

赤瀬川原平，藤森照信，南伸坊編（1993），『路上観察学入門』，筑摩書房

唐木順三著（1965），『中世の文学』，筑摩書房

■卒論ケーススタディ：1（ある村の災害史）

図版出典

図1 堤隆（2004），『浅間嶽大焼』，浅間縄文ミュージアム，p.50

図2 同上，p.68

参考文献

矢嶋仁吉（1956），『集落地理学』，古今書店

渡辺尚志（2003），『浅間山大噴火』，吉川弘文館

南雲栄治（1981），「浅間火山北麓における鎌原村の歴史地理学的研究」，歴史地理学会編，『山地・高原の歴史地理』，古今書店

浅間山麓埋没村落総合調査会（1982），『天明3年（1783）浅間山大噴火による埋没村落（鎌原村）の発掘調査』

萩原進（1985～1995），『浅間山天明噴火史料集成Ⅰ～Ⅴ』，群馬県文化事業振興会

児玉幸多，大石慎三郎，斎藤洋一（1989），『天明三年浅間山噴火資料集上・下』，東京大学出版会

■卒論ケーススタディ：2（路上観察学会はどのように美学を生み出したのか。）

図版出典

図1, 2 関根作成

参考文献

赤瀬川原平，藤森照信，南伸坊編（1986），『路上観察学入門』，筑摩書房

赤瀬川原平（1985），『いまやアクションあるのみ！読売アンデパンダンという現象』，筑摩書房

赤瀬川原平（1994），『東京ミキサー計画 ハイレッドセンター直接行動の記録』，筑摩書房

藤森照信，荒俣宏，春井裕（1987），『東京路上博物誌』，鹿島出版会

藤森照信（1999），『タンポポハウスのできるまで』，朝日新聞社

今和次郎著，藤森照信編（1987），『考現学入門』，ちくま文庫

荒俣宏（2021），『妖怪少年の日々 アラマタ自伝』，KADOKAWA

荒俣宏，環栄賢編（1991），『南方熊楠の図譜』，青弓社

荒俣宏（1987），『帝都物語』，角川書店

同時代建築研究会（1993），『ワードマップ 現代建築 ポストモダニズムを超えて』，新曜社

■卒論ケーススタディ：3（郊外から千年年を解く）

出典

(1) 星野裕司，斎藤潮（2000），「平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究」，『都市計画論文集』35巻，pp. 793-798

(2) 伊藤毅（2015），「領域史への視点、領域史の方法」，『建築雑誌』2015年5月号，pp. 4-11

(3) 唐木順三（1965），『中世の文学』，筑摩書房

図1 野々村作成

参考文献

伊藤毅（2015），「領域史への視点、領域史の方法」，『建築雑誌』2015年5月号，pp. 4-11

唐木順三（1965），『中世の文学』，筑摩書房

河音能平（1984），「ヤスライハナの成立」，『中世封建社会の首都と農村』，東京大学出版会，pp. 55-123

斎藤夏来（1997），「五山十刹制度末期の大徳寺：紫衣事件の歴史的前提」，『史学雑誌』106巻7号，pp. 1263-1295

竹貫元勝（2010），『紫野大徳寺の歴史と文化』，淡交社。

古橋信孝（1998），『平安京の都市生活と郊外』，吉川弘文館。

星野裕司，斎藤潮（2000），「平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究」，『都市計画論文集』35巻，pp. 793-798

本多健一（2013），『中近世京都の祭礼と空間構造』，吉川弘文館

仁木宏（2010），『京都の都市共同体と権力』，思文閣出版

山田宗敏編，伊藤克己補訂（1993），『史料大徳寺の歴史』，毎日新聞社

山路興造（1987），「「やすい花」再考」，『民俗芸能』68号，pp. 6-20

■卒論ケーススタディ：4（生き物とヒトの構築技術）

カール・フォン・フリッシュ（1974），『Animal Architecture』

マイク・ハンセル（2005），『建築する動物たち』

リチャード・ドーキンス（1982），『延長された表現型 - 自然淘汰の単位としての遺伝子 -』

F.John Odling Smee『ニッチ構築 忘れられていた進化過程』

J・スコット・ターナー（2000），『生物がつくる<体外>構造 - 延長された表現型の生理学』

J・スコット・ターナー（2000），『自己デザインする生命ーアリ塚から脳までの進化論』

長谷川光，『生きものの建築学』

E. ギドーニ，『プリミティブ・アーキテクチャー』

B・ルドフスキー，『建築家なしの建築』

布野修司，『世界住居誌』

THE ROYAL SOCIETY（2023），<The evolutionary ecology of nests: a cross-taxon approach>

■卒論ケーススタディ：5（震災バラック再考）

図版出典

図1 工学院大学所蔵，今和次郎バラック写真，番号19, 20, 22, 24, 27, 32を基に若佐作成

図2 同上，番号21

図3 同上，番号20

参考文献

今和次郎著，川添登他編（1971），『今和次郎集』第4巻（住居論），ドメス出版，pp285-336

田中傑（2006），『帝都復興と生活空間』，東京大学出版会

東京市編（1927），『東京震災録』別輯，東京市，第一章，pp1～124

江面嗣人（1990），「昭和前期の東京の町家形式とそれに対する市街地建築物法の影響：中央区を例として」，日本建築学会計画系論文集 第418巻，pp155-167

解築学研究

Vol. 1

2023

早稲田大学建築学科中谷礼仁研究室
解築学ゼミ

2023 年 12 月 26 日 初版第 1 刷発行

2024 年 1 月 24 日 初版第 2 刷発行

発行 中谷礼仁研究室解築学ゼミ

印刷 私家版

発行所

〒169-8555

東京都新宿区大久保 3-4-1 55N-8-9

早稲田大学理工学術院

創造理工学部建築学科

中谷礼仁研究室

TEL/FAX 03-5286-2496



早稲田大学

中谷礼仁研究室 2023 解築ゼミ 出版